

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

都道府県	学校名・名前	研究主題	研究主題の主要な研究成果
北海道	札幌市立北白石小学校	不登校状況の改善を図る相談支援パートナーの活用 ～「不登校ゼロを目指して」学校・家庭・関係機関連携の実践～	<p>①「児童理解」と「保護者理解(家庭環境を含む)」 多くの外部からの関係機関とのつながりを大切にし、支援のための情報共有の承諾を得た上で、学校側から積極的に情報提供の依頼を行うようにしてきた。更には、日常的に学校側からの情報提供も行い、関係者皆が、支援児童への認識を深め、支援に向けての具体的な方策を、それぞれの立場で検討し、新たにアイデアを出していく環境づくりを進めていくことができた。</p> <p>②「不登校」要因の解消を目指す 「なぜ、不登校になったのか。」 短期の不登校である場合は、できるだけ早い関わりをもち、その原因を解消させることにより、登校状況を改善することができた。長期にわたる不登校の場合は、まずは児童理解とともに、本時の不安をいかに取り除いていくかという視点を大切にしたり関わりをもつことが有効であった。</p> <p>③保護者の不安や悩みにも目を向ける 長期の不登校の場合、登校状況が改善しないまま、長期にわたる関わりが続くと、保護者自身に疲れや諦めの気持ちが出てくる。そこで、児童への配慮のみならず、保護者の不安や悩みにも意識を向け、児童も保護者も安心して関わりができる具体的な対応を学校側から提案していくようにしていった。それにより、登校状況の改善が図られた。</p> <p>④児童・保護者との”つながり”を、より強く、より太く！ 不登校対策の具体的な対応として、その担当者や児童・保護者とのつながりをもつようにするとともに、そのつながりをより強く、より太いものとし、学校に対する確固たる信頼関係を生むようにしていった。</p> <p>⑤具体的支援を提案した上は、それを「継続する」ことが大切。 学校側からの、継続した具体的支援により、保護者と担当者の、信頼関係の構築が図られた。そして、担当者の関わりに対する感謝の気持ちから、保護者自身に、「子どもに対し、自分も何らかの働きかけをしていこう。」という意識が生じ、一度は諦めていた保護者の関わりが、再び動き始めた。</p>
北海道	札幌市立東山小学校	教職員の危機管理能力を高め、実効性の高い安全体制を確立する ～実効性の高い避難訓練や緊急時の登下校体制の構築～	<p>○学校評価の「安全管理」に関わる項目「避難訓練や緊急時の下校訓練等を通して、自分自身の危機管理能力を高めることができたか」は、教職員アンケート(A-4点、B-3点、C-2点、D-1点の4点満点)において平均3.6点という高評価であった。</p> <p>○安全に対する取組は「これで絶対に安心だ」と言えるものはない。教職員(特に「保護者にとつての窓口」である担任)が、安全を守る取組に対する基本的な考え方をしっかり理解し『正常性バイアス』に陥らず、子どもや保護者に対応していくことが大切である。</p> <p>●学級・学年間で情報の伝え方に差が生まれないように、学校の考えを全保護者に共通理解してもらえるような手立てを講じていく必要がある。</p>
岩手	八幡平市立松野小学校	主体的に表現する児童の育成 ～算数科における「伝え合い」と「ふり返り」活動の工夫を通して～	<p>【成果】 ・プランシートを作成することで指導目標が吟味され、一単位時間の指導内容が焦点化され、目標を達成するために必要な学習活動をシンプルに構想できた。 ・伝え合いの方法や内容を吟味し、具体的な伝え合う子どもの姿をイメージすることで、児童が安心して話せる環境が作られたり算数に対する肯定的な捉えが見えたりした。 ・ふり返りの観点を明確にすることにより、本時の目標に関したふり返りができるようになった。</p> <p>【課題】 ・児童に身に付けさせる資質・能力を見据えるためにプランシートも工夫改善を進めていく。 ・伝え合い深いものにするため、発達段階を考慮した教師によるコーディネート の質を上げて行く。</p>
宮城	登米市立西郷小学校	地域を愛し、地域の未来を創り出す心豊かでたくましい西郷っ子 ～生活科、総合的な学習の指導をとおして～	<p>* 今年度は地域を十分に学ぶことができるよう、生活科、総合的な学習を大幅に見直した。地域のひと・こと・ものにかかわり、学びを深めることで、これまで以上に地域を知り、地域に親しみ、豊かな素材がたくさんある西郷地区のすばらしさを知ることができた。</p> <p>* 各学年の活動の他、栽培活動や神楽伝承活動は、縦割りで活動を行ったので、思いやりや憧れ、見通しをもって活動することができた。</p> <p>* どの学年も活動を自主的に行い、感想などもその場で自分の考えをまとめ、しっかり伝えることができるようになった。特に、6年生は南方の豊かな食の未来についてまとめ、登米市議会議員見学の時に議員さんの前で堂々と発表し、絶賛された。</p> <p>* たくさんの活動を通して、研究主題の「地域を愛し、地域の未来を創り出す心豊かでたくましい西郷っ子」に近づくことができた。</p> <p>* 今年度の活動を土台として、今後も地域と連携を深め、さらに豊かな学びができるようにしたい。</p>
山形	東根市立東郷小学校	担任力(学習指導力)アップを通して、子どもの主体的なまなびを育む学校経営 ～子どもの声を大切にしたり指導を通して～	<p>○「探求型授業」の実践⇒「生きる力育成のための授業」の意識化により担任力(学習指導力)のアップ。 視点1 課題を自分事としてとらえ、意欲的に探究する授業 視点2 友だちとかかわり合い、ともに学び合う授業 ○学習指導力を柱に、担任力(生徒指導力・特別支援教育力)の向上に波及し、校内OJTの活性化。 ○全国学力学習状況調査B問題正答率の大幅な伸びと児童会活動の主体的取り組み。 △「学びを生活に生かすことができる力」、書く・話すなど、「言葉の力」の育成。 (○:成果、△:課題)</p>
山形	飯豊町立第一小学校	「自信を育む ゆりの郷(さと)の学び舎」の創造 ～「できる・のびる・かかわる」を切り込み口にして～	<p>①進んで・かかわり合って・個に応じて学ぶ授業は、活発な交流で学び得る満足感、友達の考えをもとに学び深める充実感、小集団指導による苦手意識の克服等を生み、学力を向上させる。</p> <p>②学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる活動は、家庭内のふれあいの増加、家族の働きかけによる規則正しい生活習慣づくり等につながる。子どもの心が安定し、自主性が伸長するとともに“地域の学校”としての特色も磨き上げられる。</p> <p>③人に役立つ効能感を味わわせる活動は、子ども一人ひとりに笑顔をもたらすし、“じりつ”する力を高める。自らを律し、受容共感的人間関係を構築する“子ども主体”の活動は一層効果的である。</p>

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

山形	鶴岡市立湯野浜小学校	かかわりを通して、自ら考える子どもの育成をめざして ～自信・意欲・集中力を育む授業づくりをめざす～	<p>視点1:自ら考える力を付けるために取り組んだこと</p> <p>① ふりかえりの時間を持つ 子どもの実態に応じたふりかえりカード等で、自分のがんばりを確認し、次時への意欲づけができた。自分なりにふりかえりの内容項目を示したことで児童が何を書くべきかを理解して、授業の中でそれを意識して学習するようになった。</p> <p>② 子どもの思考の流れに沿った単元構想作り 学びの過程やゴールが見えると子どもの学びへの関心、授業への参加態度に大きな変化が見られ意欲が高くなった。単元を通してつけたい力が明確になり、子ども自身も学ぶ見通しが持て、主体的な学習につながっている。</p> <p>視点2:対話を通して学びの質を高めるために</p> <p>① 子どもたちが自分で学び合い、多様な考えを引き出すための言語活動 根拠をもとに自分の考えを説明すること、結論を話してから理由を話したり、板書などの視覚的資料を示したりして説明することなど発進力が高まった。聴く姿勢や基本的な聞き方ができるようになったので、考えながら聞き取る力を付けていきたい。</p> <p>めざす授業像について 授業像にあるように、学級みんなと話したり聴いたりして、共に学んでいく楽しさを感じて取り組むことができた。年間のはじめにめざす授業のイメージをつかむことで、年間を通して意識しながら指導を行うことができたし、子どもたちもみんな一つ一つの答えを出そう、一つの考えをまとめよう、よりよい意見にしようという意識が高くなった。</p>
山形	酒田市立一條小学校	学力向上に挑む 三人の大魔王 ～国語大魔王(自作予習課題)、新聞大魔王、算数大魔王の取組み～	<p>本校の児童の実態(よさ)に着目しながら見える学力に直結する研究実践であった。現在、研究教科は、国語から算数に移行したが、新聞・算数大魔王は継続している。本研究の実践の成果を以下に列挙したい。</p> <p>1日々の授業と家庭学習がリンクされ、予習に取り組むことで子ども達の授業に対する関心意欲が高まったこと。</p> <p>2全国学調の国語B、算数B共に向上の跡がみられること。</p> <p>3担任が単元でつけたい力を明確にしなが授業改善を推進することができたこと。</p> <p>4級外(教頭・教務)が大魔王を作成し、実態を見取ることで学力向上にむけて全職員で取り組むよさを共有できたこと。</p> <p>今後とも主体的で対話的な深い学び実現に向けて知恵を出し合い、オリジナルの研究実践を積み上げていきたい。</p>
福島	会津若松市立謹教小学校	学び合い、高め合う授業の創造 ～自己有用感をもって学ぶ子どもの育成～	<p>○ 学びの成果や自分の成長を実感するとともに、友だちと学ぶ会うことの良さに気付いたり、新たな学習への意欲をもったりして、学ぶことへの意欲を高めることができた。また、学んだことが次の学習や生活へ生かすことができたり、学んだことが自分の役に立つことに気付いたりすることができた。</p> <p>○ 聴き合う力を育むための視点を学校全体で共有する事で、授業や授業以外の場面で、子ども同士の聴き合う関係を作るための手立てが工夫され、学級の聴き合う関係が構築されてきた。</p> <p>○ 学びの実感に向かう姿を求め、仲間との学び合いを通して手ごたえのもてる授業づくりを積み重ねたことで、各教科・領域で目指す資質・能力が育まれ、学力の向上につながった。</p>
福島	会津若松市立城北小学校	伝え合う力を高める指導の工夫 ～国語科・算数科を中心とした授業の展開～	<p>1 研究の成果と課題</p> <p>(1)5つの言語意識を設定した上で学習計画を立てたことにより、一人一人が、見通しを持って意欲的にねらいに直結した学習活動に取り組むことができた。</p> <p>(2)自分の考えを何らかの形で書いたり、または、ここが分からないという自分の立場をはっきりさせたりしていくことで、聞きたい・伝えたいという思いを持たせた学び合いができるようになってきた。</p> <p>(3)日常指導に継続して取り組んできたことで、話す表情や問の取り方、ボリューム、抑揚、大事なことを落とさずに話したり聞いたりするなど、国語科で身につけた言語スキルを生かすことができた。</p> <p>(4)研究(成果と課題)をつないでいくために、授業だよりで話題になったことや授業実践の成果と課題の確認をするとともに、研究内容に対する共通の認識を深め、実践につながる研究の充実を図ることができた。</p>
福島	喜多方市立第一小学校	「光るまなざし 支え合う子」をめざして ～自らの「学び」を表現する子どもを育てる授業～	<p>○ 抽出児を選出し、その児童の学びの展開を具体的に想定して授業を組み立てることで、実態に即した手立てを講じられた。</p> <p>○ 学び合いの形式や、内容の焦点化など、望ましい学び合いのための手立てが数多く明らかになった。</p> <p>○ アンケートの結果によると、「学び合いが楽しい」と答えた児童の割合が、どの教科も90%を超えている。</p> <p>○ 板書を工夫したり、小グループの学び合いを表現する手段を工夫したりすることで、子どもの学びが視覚的にとらえられるようになった。このため、授業の振り返りにおいて、子どもに今日の学びを意識化させることに成功した。</p> <p>○ アンケートで「学習したことをきちんとまとめている」と答えた児童が85%を超えている。</p> <p>○ 自己肯定感についてのアンケートでは、「自分にはよいところがある」と答えた児童が昨年度35%ほどだったものが、今年度は70%近くまで伸びた。</p>
福島	会津美里町立新鶴小学校	関わり合い、主体的に学ぶ児童の育成 ～算数科における主体的・対話的で深い学びをめざして～	<p>1 驚きや疑問を出発点とした学習課題は、児童の主体的な学びを支えるとともに、学習意欲の持続にもつながった。また、個の学びや関わり合う学びにおける言語活動や算数的活動を十分に行わせることで思考する機会が増えたことが主体的な学びにつながった。</p> <p>2 対話的で深い学びのためには、関わり合う学びが不可欠であり、焦点を明確にした話し合いができるかどうかにかかっている。そのために教師が、考え方の共通点や相違点を明らかにすること、合意形成に向けて話し合うことを指示したことが、深い学びにつながった。</p> <p>3 効果的なノートづくりと振り返りによって、新たな学びを生み出すことができた。連続した学習サイクルは主体的な学びを引き出し、結果として深い学びを支えることとなった。</p>
茨城	ひたちなか市立三反田小学校	お互いにかかわり合い、認め合い、高め合うことができる児童・学級の育成 ～子供の笑顔を引き出し、学びを紡ぐ学習支援の在り方～	<p>平成28年度から「hyper-QU」の活用を通して、児童一人一人の思いや願いを受け止めた学級の基盤づくりを進めてきた。</p> <p>① 学級目標とルール作りを通して、全校児童の合い言葉である「ひとりぼっちにしない」を大切にしたい取組(児童の願いや思いを大切にしたい学級目標・学級の現在地を確認するためのルールの設定)を進めた。</p> <p>② 自分の思いを語り合い伝える場を大切に、安心して学び合うことができる学習の場を作り出すために、「hyper-QU」の結果を活用した座席を工夫して、生活班や学習におけるペア・グループづくりを行った。更に学力クロス表を作成し、教師の支援の在り方も吟味し児童の学びに寄り添う授業作りを行ってきた。</p> <p>③ 主体的な児童の活動を通して、学級から全校への活動の輪を広げる取組を進めている。</p> <p>・児童会活動の活性化(集会活動や各種行事の中で、高学年が計画立案し実施する)</p> <p>・全校縦割り班活動の積み重ねるによる異学年校交流活動の充実と日常化</p>

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

群馬	群馬県立中央中等教育学校	「地球市民としての日本人」の育成を土台としたグローバル・リーダー育成 ～全員の学びあいから生まれる創造性と、思考・判断・表現力の発揮～	・生徒は取組みの結果、課題研究の基礎的な方法を習得し、コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力が飛躍的に向上した。また、課題研究発表会において異なる年齢層・異なる興味関心を持つ者同士が互いに学びあう環境により、多様な物の見方や価値観に自己を開き、主体的かつ楽しんで研究を行うことのできる生徒の数が大きく増加した。 ・各教師がグローバル人材育成を教育目標としてより強く意識し、授業においてもアクティブ・ラーニングをより積極的に行うようになり、教科の授業においてもグローバル人材育成を行ういわゆる「教科のSGH化」が進んだ。 ・グローバル人材育成のための教育評価を、学校独自で作成したルーブリックを利用して行うシステムが整った。
群馬	前橋市立まえばし幼稚園	自分なりに考え、解決しようとする幼児の育成 ～幼児の考える力を深める教師の役割に視点をあてて～	成果 1「自分なりに考え、解決しようとする幼児の姿」を具体的に示したことにより、一人一人の幼児にどのような力がどこまで育っているかが見えるようになった。 2 教師の役割に視点をあてて事例を検討したことにより、幼児の興味関心を共感的に見取ることや自発的な遊びに没頭できる環境の構成を行うこと、遊びの状況に応じた適切な環境の再構成をすることなど、援助のポイントが明らかになった。 3 事例を基に教師の役割を汎化したことにより、幼児の発達に応じた具体的な援助の方向性が明らかになった。 課題 教師は、幼児の心情や関心を受け止め、好奇心や探究心を引き出したり、広げたり、伸ばしたりするなど、幼児の育ちを見取り援助できる資質や指導力をより一層磨く必要がある。
埼玉	和光市立広沢小学校	自主的・実践的な活動をとおして豊かな人間関係を築く児童の育成 ～互いのよさを認め合い、話し合い活動を充実させるための工夫～	本校では、平成28年度から3年間、特別活動、特に学級会と縦割り班活動(異学年交流)に重点を置いて研究を推進してきた。その成果としては以下の点が挙げられる。 1 児童が主体的に話し合い、身の回りにある様々な課題を、対話を通して解決しようとする姿勢が定着した。 2 学級会における他者を尊重した対話の積み重ねは、児童同士の互いへの思いやりの心の育成に大きな成果があった。 3 縦割り班活動の充実により、高学年児童としての自覚・上級生を尊重し、共に生活していこうとする姿勢等が生まれた。
埼玉	狭山市立入間野小学校	まとめる・決めるに向かって話し合い、自分から実践していく児童の育成 ～段階的な指導の手立てで、児童の力を伸ばす学級活動～	・研究1年目に、学級活動の基礎・基本を学び、学級会ハンドブックや、段階的な指導の手立て、年間指導計画の見直しができることにより、2年目は、学級活動の指導が充実し、児童が生き生きと準備し、実践に臨む姿が見られるようになった。 ・提案理由や話し合いのめあてを、児童がよく理解し、意識することが、合意形成を行いやすくし、一連の活動を、自主的にしていくことが分かった。 ・一連の学習過程で育成する8つの力を位置づけ、評価基準で児童を見届けたことは、教師の意識を変革し、児童の伸びを実感できるまでになった。 課題 ・評価補助簿をより活用しやすいものに、改良していく必要がある。 ・指導、助言のタイミングについて、可能であれば汎用的にできるようにしてみたい。
埼玉	城山学園 坂戸市立城山小学校・城山中学校	これが小中一貫教育校「城山学園」 ～県内初 施設一体型・小中一貫教育校「城山学園」の教育実践～	小中一貫教育校「城山学園」を掲げ、小中一貫教育を推進してきた4年間だった。 1 研究の成果 ① 小中の教員が協働して、9年間を見通した系統的・継続的な指導を行い、子どもたちの学力が着実に向上している。 ② 小学校5・6年生には、中学校教員による専門的な指導を行い、小中の教科連携が図られ、中学生の学力が高まってきている。 ③ 9年間を見通した道徳や体験活動、異年齢の交流活動を行うことで、子どもたちに豊かな人間性や社会性を育成することができている。 ④ 子どもたちを小中の教員が連携して指導したことで、いじめゼロ、問題行動ゼロ、小学生の不登校ゼロにつながっている。 2 今後の課題 小中一貫教育校「城山学園」でしかできない、新たな試みを始めていきたい。
埼玉	富士見市立鶴瀬小学校	自分も相手も大切にできる児童の育成 ～自分もよく相手もよいこと」を話し合う学級活動(1)の実践を通して～	○話し合い活動を中心に据えた学級経営の充実によって、学級に自分の居場所があり、自分の意見を相手がしっかり聞いてくれる、誰も否定されないという安心感に裏付けられた親和的な学級の風土が醸成され、自分の意見を言える児童が増えてきている。 ○学級活動で育成すべき資質・能力を明らかにし、年間指導計画を見直したり、学級活動と各教科の関連を単元配列表に位置づけたりすることで、6年間を見通した計画的な指導体制の確立、「往還的」な関係を生かした授業改善が図られるようになってきた。 ●成果が一時的なものにならないよう、継続的な取組が大切であると考えている。特に「自分もよく相手もよい」合意形成のための児童への効果的な助言や計画委員への支援の仕方については、これからも研究を続けていきたい。
埼玉	熊谷市立大幡小学校	確かな学力を身につけ、主体的に表現する児童の育成 ～学校図書館の利活用を通して育む資質・能力～	1 学校図書館を活用した、児童の発達段階に応じた学習過程における探究的な学習の実践。 2 学校図書館の利活用を、教科の教育課程へ組み込む。 3 学校図書館の資料の充実を図った、環境の整備。 本研究により、以下の成果が得られた。 1 調べたいことがあるとき、複数の資料で調べる児童の増加→児童の情報活用能力の向上 2 1類・総記, 4類・自然科学といった、文学以外の本を借りる児童の増加→児童の主体的な探求心の高まり 3 児童が本を読む冊数の増加 これらの結果をもとに、次年度は教室やコンピュータ室等を学校図書館の分室と考え、学校図書館の活用の幅を広げ、児童の探求的な学びの実践をさらに積み重ねていく。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

埼玉	上尾市立原市南小学校	外国語を通じて、自立的・主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～学習指導要領の改訂を見据えて～	【成果】 ○アンケートを用いて児童の実態把握をすることで、児童の興味・関心を高める場面設定や教材を工夫し、必要感をもたせることができた。そのため、児童が積極的に活動する姿を多く見られるようになった。 ○授業の流れを統一したことで、教員が自信をもって授業が行えるようになるとともに、児童も安心感をもち、自信をもって活動できるようになってきた。 ○活動のねらいに即した自己評価ができる振り返りカードについて検討した。児童が自分の成長を確認したり、教員が児童の思いに触れ、次の活動に生かしたりすることができるようになったことで、より自立的・主体的なコミュニケーションがとれるようになってきた。 【課題】 ○中学校との接続を円滑にするための小中連携を進めていく。 ○外国語活動で身に付けたコミュニケーション能力を、他教科や生活全般の中でいかしていくための場の設定や見取り方の研修を進めて行く。
埼玉	加須市立北川辺西小学校	21世紀を主体的に生きる児童の育成 ～ふるさとのよさを活かした学校・家庭・地域の連携による緑化・食育を通して～	1 環境緑化や食育の視点から、学校教育全体の中で横断的に学習活動を進め、学校全体で共通理解のもと、教育実践を進めることができた。 2 ピオトープづくりや食育等の様々な体験活動を設定し、学習に対する児童の興味・関心を高め、感性を磨く教育活動を行うことができた。 3 「あいさつは 目を見て 笑顔で 心を込めて」を合い言葉に、地域の方にも気持ちのよいあいさつをしようと、PTAで連携した。児童は、感謝の念をもってあいさつする大切さを学び、習慣化してきている。 4 渡良瀬遊水地環境学習発表会や加須市環境フォーラムにて本校の日頃の取組を発表し、地域に情報を発信することができた。 5 今後も継続して、家庭・地域と共に、学び続ける態度やふるさとを大切にすることを育んでいく。
千葉	千葉市立幸町第三小学校	確かな学力と豊かな人間性を育む小中一貫教育の推進 ～9年間を見通した計画的・継続的な教育活動の工夫～	本校と隣の幸町第二中学校では、学習指導における小中教職員間の連携を深めた授業改善や9年間を通じた計画的・系統的な行事・交流活動を柱に小中一貫教育に取り組んでいる。そして、小中合同の教科部会をもとに、小中一貫教育目標に向けて各部会で取り組みを行ってきた。教職員アンケートの変容から、職員の協働意識や小中一貫教育の必要感についての項目で大きく上昇が見られた。児童生徒アンケートからも、「学校が好き」「学習内容がよく分かる」「中学校進学が楽しみ」についての項目も上昇している。また「職員の協働意識と小中一貫教育への期待感・必要感の関連性」や「学習の理解度と中学校への期待感の関連性」についても相互に関係のあるものであることが見られた。今後も継続して、この指標をとっていくことで児童生徒の成長を実感でき、小中一貫教育への手ごたえを感じることができよう。
千葉	松戸市立常盤平第一小学校	思いを伝え合える授業づくり ～実生活に生きる道徳・特別支援教育を目指して～	学習指導要領の改訂を踏まえ、道徳における改訂の重点である「学校の教育活動全体を通じ て行うことを基本とする。」「全学年が子ども一人一人に自分自身を見つめ、人格形成を目的とし て授業の展開」「いじめ問題への対応等現実の困難な問題に子どもが主体的に対処できる実効 性のある力の育成」の3点を大切にしたい。特別の教科「道徳」について改訂された4つの視点や 「考え議論する道徳」など理論的な道徳について、また、「心の円グラフを通して一人一人の微妙な 思いを視覚化させること」「ねらいとする道徳的価値における自分自身を振り返り、見つめる 時間」の大切さなど、今後も児童の自己肯定感の向上につなげられ、児童が学校生活を充足で きるような指導へとつなげていく。
千葉	旭市立矢指小学校	「わかった」を自らの力でまとめあげる児童の育成 ～思考のプロセスを表現する算数科の指導を通して～	○自力解決場面での成果 ・学習過程の揭示は自力解決を促進する。 ・予想や解決方法の確認を行うと、積極的な取り組みに結び付く。 ・時間に余裕のある単元計画が、大切である。 ・解決のための表現方法は、複数用意すると効果がある。 ・思考の整理では気づきやひらめきを書き残すことが大事である。そのために付箋紙やノートへの吹き出しの記入が有効である。 ○比較検討場面での成果 ・意見の交流は考え方の重点に着目する効果がある。似た意見でも、効果は期待できる。 ・発表では、板書をする者と説明を行う者を分けることで、自分の考えの整理と他の児童の考えの深まりにつながる。
千葉	千葉県立船橋特別支援学校	肢体不自由特別支援学校における児童の学ぶ意欲を引き出す授業づくり ～ICT機器活用の事例を通して～	・Web会議システムを活用したことで、訪問籍の児童が自宅で学校の授業に参加し、交流する機会が増え、互いに理解を深めることができた。 ・タブレット型端末は、全方位カメラや音声入力ソフト、ジョイスティックマウスなどを併せて使うことで、様々な場面、児童の認知発達や障害の程度に合わせて効果的な使い方ができた。 ・ICTに関する校内研修を計画的に行ったことで、校内のICT機器の稼働率が増え、積極的に授業に活用する教員が増えた。 ・授業場面に応じた適切なICT機器を選定できるような環境の整備が必要である。ICT機器を使いやすいよう整理し、どのような場面でもどのような機器が使えるかをリスト化することで、授業場面に応じたICT機器の活用を共有化できるとよい。
千葉	栄町立安食小学校	グローバル人材の育成 ～国際理解教育や外国語活動を通して～	1 成果 (1) 目標の明確化と共通理解を図ることにより、教職員のベクトルがそろい、国際交流活動が活性化され、児童のコミュニケーション能力や主体的に取り組む態度、チャレンジ精神が伸びてきた。また、相手を受け入れる思いやりの心が育ってきた。 (2) 地域の関係機関と連携し、自国の伝統や文化の良さを感じし表現する活動や外国の文化の良さを知ることのできる活動を企画し、教育課程に位置付けることができ、児童の自己表現をしようとする意識や他国の文化を受け入れる意識が高まってきた。 2 課題 (1) 国際交流の場や自国の文化や異文化について触れる機会を定期的にコーディネートするために、関係機関との連携をさらに図っていかねばならない。 (2) グローバル人材を育成するために、職員が意識し教科や特活の学習に取り組みするよう研修の企画や新しい情報の収集と職員への提供をしていく必要がある。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

千葉	柏市立柏第二小学校	伝え合う力を高め、自分の思いや考えを深める子どもの育成 ～国語科における言語活動の充実を通して～	1. 児童の変容 (1)話し合いの際に「相手の考えを聞くこと」「自分の意見を発表すること」についての意欲が高まった。 (2)わからないことを人に聞いたり自分で調べたりする態度が育ってきた。 (3)授業の中で一人一人が認められることにより、自己肯定感が高まり、学ぶ意欲や将来への期待が高まっている。 2. 教員の変容 (1)単元を貫く言語活動の設定し、話し合い活動の設定の仕方に視点を置き教材研究をすることにより、主体的・対話的な学びにつながる指導法の工夫改善を進めることができた。 (2)「話し方レベルアップ表」を他教科でも活用することで、伝え合い、話し合いながら課題を解決し深めていくという学び方が、日常的に展開されるようになってきた。
千葉	市川市立福栄小学校	新米校長が『アモーレ！』の思いで取り組む学校経営 ～特別な支援を必要とする児童の対応を中心として～	【成果】 ・Y児の表情は転入した5月と比較すると、比べ物にならないほど穏やかである。自分の存在価値を認めてくれる場所が学校の中にもたくさんあり、安心して学校生活を送っていることがわかる。 ・自分の意に反することであっても、以前は癇癪を起こして暴れることが多かったが、その回数は減ってきており、我慢することを覚えてきた。 ・声をかけると素直な返事を返すことが多くなり、心の成長を感じる。 【課題】 ・突発的な行動は、予想をしないときに起こすことがあり、同級生に大げなけを負わせてしまう危険性を感じるということが何回もあった。これは、Y児のもっている衝動性ではないかと考え、今後医療との連携を図る必要性を強く感じている。 ・4月に教育委員会と連携し、医療とつなげていく予定である。
千葉	市原市立辰巳台西小学校	基礎的・基本的な知識や技能を身に付け進んで学習に取り組む子の育成 ～算数科学習における「わかる・できる」授業づくりをめざして～	Ⅲ「主要な研究成果」 1 学習の「めあて」と「まとめ」のつながりを意識することで、学びに対する児童の思いと教師の願いが一致した授業を行うことができ、授業の質の向上にもつながった。 2 学年ごとに、児童の実態や学習内容に応じた学習形態を工夫することで、「自分で考える」「話す・聞くことのスキルアップ」「他の考えの良さに気づく」等、それぞれの学習形態の良さを生かした授業を行うことができた。 3 話し合い活動を取り入れた学習では、理解に時間がかかる児童も、友達の意見を聞くことで何かに閃いたり、考えを深めたりすることができ、学びの楽しさを感じるできるようになった。
千葉	千葉県立市川工業高等学校	新学習指導要領を見据えた「キャリア教育」における「基礎的・汎用的能力」育成のための教育実践に関する研究 ～「金子の時間」及び高校生起業体験プログラム「高校生夢マルシェin鎌ヶ谷」の実践について	・私が目指す教育は、「自ら(感じる・学ぶ・考える・実行する(実践する))生徒を育てる。」である。 「感じる力」は、「キャリア教育」における「基礎的・汎用的能力」育成や新学習指導要領(工業)に明示された「職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指す自ら学ぶ」「産業の振興や社会貢献」「協働的に取り組む」ことに関しても重要なキーワードとなりうると考えている。 ・今回ご紹介した実践では、生徒たちからたくさんの「感じる」言葉を聞くことができた。生徒たちはこのプログラムを通じて、私がインテリアデザイン教育で育てたい力のほとんどを使い、困難をのりこえ、それを自ら伸ばす体験をしたと思う。大きな達成感と共にきっと多くの「気づき」が得られたのではないだろうか。
東京	葛飾区立西小菅小学校	自分の考えをもち、学び合いを通して学習を深める児童の育成 ～算数科 活用する力を育てる指導の工夫～	<成果と課題> ○ 学習過程ごとの「活用する力」を明確にすることで、校内での共通理解をもとにした指導を展開することができた。 ○ ペア学習やグループ学習などを充実させることで、式や図・数直線など多様な数学的表現を活用する楽しさやよさを味わう児童が増えた。 ○ 前時までの学習内容をノートで確かめる姿が多く見られるようになるなど、児童が既習事項を活用して学習を進めようとする態度が身に付いてきた。 ○ 算数の学習だけでなく身近な生活や新しい学習にも既習事項を活用する意識が高まったことが伺えた。 △ 学年が上がるごとに学力差が広がる傾向が引き続き見られた。児童の実態を適切に把握し、学習支援の一層の工夫を図っていく。
東京	葛飾区立清和小学校	漢字学習に対する興味関心を促し、論理的思考力を育む単元の開発と実践	(1)成果 (ア)児童の実態に即した「清和小の児童のため」の単元開発をしたこと (イ)児童の実態に応じた、学習材の開発・単元構成の工夫による指導の効率化が図れたこと (ウ)「我が国の言語文化と言葉の特徴や使い方」に親しみ児童を育成できたこと (エ)自ら言葉に親しみ、言語意識をもって言葉と関わり、その面白さを追究しようとする児童を育成できたこと (2)課題 (ア)年間計画をもとに、より系統的なカリキュラムマネージメントを図ること (イ)身に付けたい力を明確にした授業展開と指導法のさらなる充実を図ること (ウ)学習の成果を有効に活用することのできる単元構成をさらに工夫すること
東京	小金井市立南小学校	かかわり合い、主体的に学ぶ児童の育成 ～国語科「話すこと・聞くこと」の活動を通して～	「話すこと・聞くこと」の単元において習得した技能を、他教科・領域において活用を促すことで、以下のような児童の変容が見られた。 ①双方向の伝え合いが成立し、話し合う内容に深まりがみられ、相手を理解しながら話し合おうとする意識と態度が育った。 ②言葉によって課題や問題を解決するように導くことは、思考力や判断力を養うこととであった。 ③児童同士の話し合いだけではなく、教師が児童の話し合いを価値付けて示したことで、対話や話し合いを通して深い学びにつなげることができた。
東京	多摩市立青陵中学校	主体的に考え、対話的に学びを深める授業の工夫・改善 ～新学習指導要領の具体化を目指して～	1 特別の教科道徳についての学習指導要領の趣旨やその具体化について研修し、これまで教科で培った7つの改善策を特別の教科道徳においても共通実践することで授業への関心・意欲が高まり、深い学びのある授業へ変容する、という仮説を検証した。 2 その結果、道徳科の授業においても生徒の興味・関心、学びの深まり、教師の道徳科の授業指導への自信などが高まり、全校で道徳の授業改善を行うことで生徒の他の学習活動や地域活動に積極的に参加する状況が生まれた。また、ローテーション授業も定着した。 3 道徳科の評価を理論と実践の両面から研修を行うことで、評価材料の収集、評価の表記、学習評価の活用などについて進展し「道徳科と各教科」「道徳とESD」などカリキュラム・マネージメントの考え方を生かし、横断的な学習指導などが具体化された。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

東京	八王子市立みなみ野小中学校	自ら考え、公平に判断する児童・生徒の育成 ～小中学校9年間を通し、重点内容項目をより充実した道徳教育の実践～	1「小中9年間を通じた、体系的な道徳教育に向けての取組」について 【成果】「小中一貫道徳教育全体計画」「重点項目カレンダー」の作成により、「道徳授業年間指導計画」と併せて、体系的な道徳教育の計画を立案することができた。 【課題】児童・生徒の現状等により「重点項目カレンダー」「道徳授業年間指導計画」の内容を定期的に改善していく必要がある。 2「重点内容項目についてのカリキュラム・マネジメント」について 【成果】「重点項目カレンダー」の作成は、「公正、公平、社会正義」を意識した教育活動を行うことや、道徳科の重点内容項目に関連する教育活動の明確化に役立った。 【課題】「重点項目カレンダー」の活用についてさらに工夫・改善が必要と考える。 3「要となる道徳科の在り方の研究」について 【成果】3年間の授業研究・実践を通して、教師一人一人の道徳の授業力が向上した。 【課題】道徳科の今後の動向に注視し、授業改善、評価について不断に取り組んでいく。
東京	文京区立湯島小学校	みんなを笑顔にするプログラミング的思考の育成 ～「湯島情報科」を軸とした、カリキュラム・マネジメントの工夫～	(1) 本校で育てたい資質・能力の設定 本校では、情報活用能力及びプログラミング的思考の育成に向けて、小学校段階において育てたい資質・能力を整理した。 (2) 『湯島情報科』を軸としたカリキュラム・マネジメント 情報活用能力を発達段階に応じて計画的に育成するため、全学年共通の大単元『湯島情報科』を設定した。これは、情報活用能力を小学校の6年間で計画的に育成するため、各学年で指導する内容を整理したものである。各教科等の内容に散在している情報活用能力と『湯島情報科』の指導内容を関連付けながら、教科横断的年間指導計画を作成した。 (3) 単元及び授業デザインの構想 プログラミングを体験することを通してプログラミング的思考を育成するために単元をデザインした。課題設定の段階では、いつ、誰のために、何のために、どのように、何をするのかを児童に考えさせ、学習のゴールを明確にもたせ、問題解決の後、グループでプログラミング教材を活用し、協働的に学び合いながら作品を仕上げた。完成した作品は、他のグループに制作の意図を説明しながら見せ、よりよい作品になるよう、話し合い、それを受け改善しながら学習のゴールに到達していくようにした。 (4) 発達段階に応じたプログラミング教材の開発・選定 プログラミングそのものが目的とならないように教材の選定や開発を行った。 ○低学年では、簡単な命令を組み合わせて動かすプログラミング・ロボットやカード教材を中心に「順序」等を考え、身近な問題を解決することを目指した。 ○中学年では、ビジュアル・プログラミング・ソフトを使い、「順序」や「分岐」、「繰り返し」を考えながら、ブロック等に記された簡単な命令・動作を組み合わせ、自分の意図した一連の動きを実現することを目指した。
東京	東京都立千歳丘高等学校	学校の活性化につながる国際理解教育の推進についての研究	【成果】 1. 生徒の変容として、海外修学旅行での学校間交流や本校を訪れた海外の高校生や留学生との交流体験によって、国際理解教育が進み、外国語や外国文化に対する意識啓発が進んだ。また日本の伝統文化や2020東京オリンピック・パラリンピックについての興味関心も高まっている。 2. 教職員の意識の変化が顕著で、新しい企画を立案し、海外学校間交流事業に主体的に取り組む教員が増えている。 3. 学校の特色として、国際理解教育の推進が柱となり、平成28年にこの取組みを始めてから入選倍率も上昇している。 【今後の課題】 1. 東京都教育委員会から海外学校間交流事業の指定を受けているが、単年度の指定であるため、中長期的に継続する対策が立てにくく、また公立高校の課題として、管理職や担当者の人事異動などによる継続性に不安がある。
東京	日野市立日野第八小学校	地域に愛着をもつ子の育成 ～地域と豊かに関わる活動を通して～	本校では研究主題を「地域に愛着をもつ子の育成～地域と豊かに関わる活動を通して～」と設定し、昨年度から引き続き地域をフィールドとした研究を進めてきました。その背景には、平成31年度に学校創立50周年を控え、学校創立に尽力下さった地域の方々の想いを受け取るには、まずは児童、教員が地域を知り、愛着を深めることが大切だ、と考えたことがあります。自分たちのルーツである地域を愛することが、50周年を心から祝い、喜ぶ児童を育成することだと思ったのです。その中で、「どうすれば地域に愛着を持たせることができるのか」「そもそも愛着の度合いはどのように量つたらよいのか」といった疑問や課題が次々と出てきました。一方で、地域の風土、郷土の歴史に詳しい方と共にフィールドワークに全員が出かけ、「地域教育資源の開発に意欲的に挑戦したこと」、「地域の人的資源を活用した新しい単元を開発したこと」など成果も現れました。平成31年度は、2年間の研究をさらに発展させ、「接続可能な社会づくりに向けた教育推進校」として東京都の指定も受け、持続可能な社会の担い手を育てる教育、すなわち「ESD」の実践に取り組んでいきます。
東京	青梅市立霞台小学校	相手のことを思い・考え、学び合う児童の育成	1 人権教育と関連付けた指導を行うことの重要性を教職員が認識し、人権教育としての教育活動を展開することができたことである。 2 教職員が人権感覚を意識することにより、児童との信頼関係づくりに生かすことができたことである。 3 全校で、たてわり班活動による「学校びかびか大作戦」や全学級での「スタディタイム」などの特色ある活動等により、全校で組織的に取り組むことができたことである。 今後の課題 1 人権課題に向き合っている人のことを“思い・考え”理解を深めるために、児童の実生活に根ざした指導を引き続き行っていく必要がある。 2 各教科等において、児童が“学び合う”ことを重視して、確かな学力の向上を目指し、指導を充実させていく必要がある。
神奈川	相模原市立中央小学校	進んで学び たくましい子の育成を目指して ～知りたい やってみよう の気持ちを高めるために～	○朝活動の工夫により、子どもたちの学習に向かう姿勢・意欲・集中力が高まるのではないかと考え、「おひさまタイム」を次のように実践した。その結果、子どもたちが1校時から進んで学習に取り組むようになった。 ・方法:「おひさまタイム」毎週水曜日の朝活動 ・活動:校庭を開放し、「太陽の光をあびる」「体を動かして遊ぶ」 ○学力向上と健康教育の研究を通してめざす姿が具体的に定められなかったことや相互の関連を整理することができなかった。それによって研究の深まりが感じにくかった。次年度は健康教育に重点を置くことで、学力向上につなげたい。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

神奈川	川崎市立西有馬小学校	友だちとの関わりの中で 自分の思いを生き生きと表現する子の育成をめざして	1. 授業づくりの視点を設定し、視点に対して全員が授業公開し研究を行った。各教諭の授業づくりに関する意識の変化がみられた。「主体的な学び」になるために、導入・学習計画の共有・適切な課題設定が重要になることや、「対話的な学び」のために、授業時間に多様な伝え合う活動をどのように設定していくか、伝え合う活動での指導のポイントなどが、研究課題として挙げられ、実践を重ねることができた。 2. どの子にもわかる楽しい授業をめざし、ユニバーサルデザインの視点について、研究を行い、授業研究会で授業を見直していった。様々な工夫が紹介され、手立てが共有された。 今後は、国語の授業にとどまらず、各教科の授業づくりに、この研究を生かしていく。
神奈川	横須賀市立追浜小学校	学び合い 認め合い 高め合う 授業作りをめざして～算数の授業を中心として～	①「説明文＝筆者の伝え方の工夫を学ぶ」という目的で学習を進めてきたこともあり、4月から行っているスピーチでの話す力や自分の意見を書く力などが高まった。構成を意識したり、順序の言葉を取り入れたりと自分の伝えたいことを分かりやすく伝える力が身についてきた。 ②日々の学級経営の中で「相手意識」「聞き上手」など相手の考えを認め合う環境を整えたり、学習する上で相手の学習を妨げるような行動には毅然とした態度で対応したりした。これらの手立てを通して、安心して学べる環境をつくることも有効であった。
神奈川	綾瀬市立綾西小学校	自分らしく、豊かに学び合う子 ～聴いて、考えて、つなげる授業づくりを通して～	【研究の成果】 ○授業づくりを工夫することによって、課題を自分のこととしてとらえ、友達の考えや思い進んできいたり、自分の考えや思いを進んで伝えたりすることができる児童が増えてきた。 ○各学年ブロックにおいて、重点課題の見直し・検討を行い、改めて課題を決定した。児童の発達段階や、低学年から高学年に至る系統性を意識した重点課題が設定され、授業の中での子ども達の姿を具体的にイメージしながら研究授業の構想を練ることができた。 ○教科を絞らず、いくつかの教科で研究授業を行ったため、さまざまな角度から研究することができた。そこから、各学年の児童の実態に合わせて、職員が授業で「聴くこと」「考えること」「つなげること」を大切にするとする共通意識を改めて持つことができた。 ○児童の主体性を育てる取り組みとして、家庭学習を校内研究に継続して位置づけることができた。各学年に応じた取り組みの例をプリントにして家庭に配付したり、学期に一度「家庭学習がんばりカード」に取り組みせたりした。また、保護者向けの校内研究日より「P-Jupiter」には、研究授業の様子、家庭学習がんばりカードのコピーや保護者からのコメントに加えて優れた家庭学習のノートを掲載し、綾西小学校で行っている研究について知らせることができた。 【今後の課題】 ○研究主題である「自分らしく、豊かに学び合う子」について職員全体で共通認識をもって研究を進めていきたい。そのためには、学年ブロック研究や学年会で「自分らしく」とはどういう姿なのか、「豊かに学び合う」とはどのような姿なのかを、児童の実態に照らし合わせて話し合うことで明確化する必要がある。 ○「自分らしく、豊かに学ぶ合う子」を育てるために、パワーアップタイムの充実を図りたい。そのために、全体や学年ブロックにおいて取り組む内容を今よりも話し合いたい。「何を行うと、どんな力が高まるのか」や「どんなことを行うとよいのか」など、実践例を活用しながら研修会的なもの(10分研修会)を行うことで、職員の参考になるようにしたい。 ○研究授業の期間だけで研究を実践するのではなく、年間を通して研究を継続していくことが「自分らしく、豊かに学び合う子」の育成につながる。あらゆる教科の、あらゆる
神奈川	小田原市立下府中小学校	主体的な学習者としての高まりを目指す算数指導 ～マスタリーラーニング、兆候分析に基づく指導法の改善～	～マスタリーラーニング、兆候分析に基づく指導法の改善～ 1 マスタリーラーニング理論に基づく九九チェックカードを開発し、2年生全員に実践することができた。そのことにより、時間内にばらばら九九を言い切る目標をもって意欲的に取り組む姿が見られた。また、明確な基準をクリアしようとする中で「努力すればできる」という自己肯定感を育むことができた。3年生の割り算学習に役立つばかりでなく、今後、思考力・判断力・表現力に力を注ぐことが期待できる。 2 共感的に関わろうとする主体的な学習者としての高まりというのは、どういうことか、どういう言葉を使ったときに取り上げて、さらに、クラス全体に広げていくべきかを分析した。付加、比較、推論、仮定など11の良さの兆候を設定できた。そうした指導を繰り返す中で、「授業のとき、ルールが決まっていますか」等の児童アンケートにも向上が見られた。
神奈川	平塚市立金旭中学校	学習指導要領一部改正における『特別な教科道徳』について ～豊かな心をはぐくむ道徳実践力の研究 ～考え、議論する道徳～	『特別な教科道徳』は、各教科等で行う道徳教育として取り扱う機会が十分でない内容項目に関わる指導を補う「補充」や、生徒や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深める「深化」、内容項目の相互関連を捉え直したり、発展させたりする「統合」の役割を担っていると捉えている。そこで本校では、H30年度からH31年度にかけて、振興基金を活用し、道徳教育推進教師を中心とした学校全体で取り組む道徳教育の実践を、講師を招聘したり、教材教具を工夫したりして、「補充」「深化」「統合」の充実を図ることとした。
神奈川	横須賀市立公郷中学校	子どもの分析に基づく教育課程の編成 ～生徒理解の深化に向けた時間確保をめざして～	1. 子どもの分析・実態に基づいた教育課程を編成することで、授業日数が増加し、それにより生み出された時間の活用によって、生徒学習時間を保証することができた。 2. 長期休業日を活用した授業日数の増加は学びの継続にもつながり、生徒の基礎学力の向上に大いに役立った。 3. 地域の実情に応じた教育課程の編成は、子どもと向き合う時間のより一層の充実に直結していることを痛感した。 4. 今後の課題として、学校行事の実施時期や精選を通して、生徒理解を基にした教育課程の更なる編成をしていきたい。
神奈川	横浜市立末吉中学校	支援を必要とする生徒の視点に立った教育活動の展開	①ステージ用昇降機レンタル 車いす生徒の卒業式での安全な移動のため、練習期間中レンタルし、安全にステージに上ることができました。 卒業証書の授与を、ステージで、全員でお祝いできる形で行えたことの意義は大きいと思います。 ②第二相談室の整備(購入物品:パーテーション、ホワイトボード、文具) 相談活動や別室登校生徒の学習の充実のために、レイアウトを変更しました。パーテーションで区切り、生徒が居心地よく過ごせるようにしました。 別室登校生徒が、少人数で学習できるよう、新たにホワイトボードを購入し、黒板の代わりに使用しています。 第二相談室用の文具として、プロッキーを購入し、使いたいときにすぐに使えるようにしました。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

新潟	長岡市立越路西小学校	学習意欲を高め主体的に学習に取り組む児童の育成 ～アクティブ・ラーニングを通して～	思考を活性化するアクティブ・ラーニングを目指し、三つの指導の要(①付けたい力を明確にした単元づくり ②一人一人の学びを表現につなげる言語活動の工夫と並行読書 ③多様な話し合う場の設定)に基づく実践を2年間継続し、実効性を高めるポイントを明らかにした。 第一に、創造的な単元開発を行う際に重要なことは「学ぶ必然性」である。学習者の学ぶ意欲を駆動させ、ワクワク感を持続させる価値あるトピックを考え抜くことが求められる。 第二に、単元指導計画は児童の実態を踏まえ、柔軟に構成や展開を考えることが必要である。学習全体を一目で見通せる学習ナビゲーションの提示も有効である。 第三に、児童が選択(判断)する場を言語活動に位置付けることである。これにより、学びに向かう情動が継続し、ゴール(表現活動)における満足感が高まる。ただし、内容や児童の実態に応じて、選択する範囲をコントロールする必要がある。 第四に、児童の見方・考え方を自覚・相互理解・変容させる教師の働きかけを挙げることができる。児童の話合いの質を高めるには、膠着場面での教師の適切な助言や不十分な発言内容の補足・言い換え、課題の再設定等の働きかけが必要になる。
新潟	新潟市立沼垂小学校	子どもを鍛える体育授業 ～身体と思考と自主性と～	沼垂小学校では、「試しながら学び、進んで運動する子ども」の育成を目指し、「身体を・思考を・自主性を鍛える」の3本柱で体育の授業研究に取り組んできた。「元気アップタイム」と「試す活動」による授業改善と「体力レコード」や運動環境の整備、教材教具の工夫により、子どもの自主性を育てる取組を行った。 <成果〇と課題△> 〇目指す子どもの姿を具現化するための「元気アップタイム+試す活動」という授業フレームが明確になった。 〇シンプルな学習課題の提示と動きの焦点化によって、思考しながら動きを試し、技能を習得する子ども姿が見られるようになった。 △児童の実態、運動の特性等を受け、学習課題解決の場面における「試す活動」より有効な、具体的な手だてとしていく必要がある。
新潟	上越市立城北中学校	地域に学び、地域を誇り、よりよい社会づくりに参画する生徒の育成 ～キャリア教育を中核としたカリキュラム創造と実践～	1 研究成果 ・教職員が目標を共有し、知見を出し合うことで自校のカリキュラムが創造されたこと ・自校のカリキュラム創造を通して教職員のカリキュラム・マネジメント力、授業構成力が育まれたこと ・教職員のカリキュラム・マネジメント力、授業構成力の向上を通して教育活動の質が高まり、生徒に必要な資質・能力が養われていくことが実感できたこと ・教育パートナーである保護者や地域との協働に支えられて充実することを実感できたこと 2 課題 ・主体的・対話的で深い学びを実現する授業力の向上 ・全教員のカリキュラム・マネジメント力の向上と年間指導計画の改善 自分の将来と照らし合わせる場面や「知ること、理解すること」がこんなにも生活を豊かにするという実感させる場面が、これまで十分ではなく、生徒の関心・意欲を引き出せなかった。年度当初に作成した単元計画や年間指導計画にも、導入の場面で「何を学び」「どのように学び」「何ができるようになるか」を生徒と共有することを位置付けたり、地域との連携をより具体的に示したりするなど、早急に着手する。
新潟	出雲崎町立出雲崎中学校	自己を見つめ、多面的・多角的に考える生徒の育成 ～主体的に考え議論する授業を目指して～	「考え、議論する道徳授業」のために、①「自分の考えを可視化できる指標を用いて意見交流させる。」、②「道徳的問題を明らかにし、中心発問で深めさせる。」、③「道徳的価値の理解を自覚させるために、振り返りを工夫する。」の3つのステップを手立てとすることで、生徒の意見交流が活発になったり、自分ごととして捉え考えを深めたりすることができた。 ・校内における毎時間の道徳授業を公開したり、学年部職員が輪番制で授業を行ったりすることにより、職員の道徳授業力の向上につながった。 ・道徳の教科化に向け、授業における「ねらい」と「中心発問」の設定や道徳的課題に対する小グループによる話し合いの持ち方、道徳ノートの活用と振り返りのあり方について研修を深めることができた。 ・翌30年度には学期の通知表に道徳の評価を記載することとし、職員研修を行った。 評価文については、①「生徒の具体的な取組状況」、②「顕著だった教材について」、③「生徒の考えの深まりや振り返りから」と定型化した。
富山	富山県立富山工業高等学校	クラブ活動を通じたものづくり教育 ～ロボット大会出場を通じた指導～	1 設計から製作、組立やロボット操作等の一連の製作活動を通して、これまでに学習した工業に関わる知識や技術の定着が図れた。 2 問題解決のために生徒たちが自ら考察を深め、考えたアイデアを実現できるように促し、創造性に富む発想力の育成を図れた。また、完成後、より良くするためにどのように改良や改造をすればいいかという問題解決能力を向上させることができた。 3 ロボットの部品製作で身につけた機械操作や加工技術を証明するために、技能検定等の資格取得を積極的に勧めた。生徒たちもやる気みなぎり、積極的に取り組むことができた。 4 ロボットの部品製作を行う時は安全作業を徹底するので、授業や作業における危険行為や服装の乱れ等も改善された。
石川	石川県立金沢錦丘高等学校	中高接続を活かした教育活動の実践研究 ～併設型中高一貫教育校としての魅力づくり～	・授業や補習を通じた中学生と高校生の交流により、学力向上のみならず、コミュニケーション能力の育成や自発性の発露が十分に期待できる。 ・教員の、校種を越えた授業経験や協同研究により、教育観の深まりや指導スキルの向上が期待できる。 ・中高連携を生かした地域貢献、地域交流に関する取組はまだまだ不十分であり、今後は地域を巻き込んだ教育活動やPR活動を検討していく。
石川	石川県立飯田高等学校	地域活性化を担う「能登人」の育成 ～地域連携の再構築(地域機関、人的資源の協力・活用)の一翼として～	1. 本校総合学科では、<ビジネス実践力の育成>をテーマに、地元企業、行政等の諸機関との連携の中で、地元産品を活用した新商品開発や生徒による自主企画のイベント開催、観光地のガイドなどに取り組んできた。 2. また、学校設定科目「地域学」では地域講師等をお招きし、地域の理解を深める講演会の開催、地域をフィールドとした体験的活動等を多く取り入れ、地域愛を育んでいる。 3. H28・29・30の3年間、地元商店街や行政主体の芸術祭、地域関連企業の協力のもと「産学官地域連携人材育成事業」を展開し、地元からも活動の成果が認められ高い評価をいただいた。 4. 石川県珠洲市全体をフィールドとして、生徒自身が考える企画や実践により、コミュニケーション能力を含む人間関係力は向上した。また、課題解決能力や地域に対する愛着や貢献しようとする意識も高めることができた。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

長野	上田市立塩田中学校	新たな不登校生徒を生み出さない未然防止の取組 ～生徒の自己有用感を高め、安心安全な集団をつくる取組を通して～	<ul style="list-style-type: none"> 平成30年度、1学期から2学期における欠席数の増加率は昨年に比べて減少した。しかし、夏休み明けに欠席が長期化する生徒があり、その内欠席日数が100日を超えて重症化するケースが2年生を中心に増加した。個々の生徒に応じた声掛けや、教育相談、家訪問による保護者との連携、SSWやSCの力を借りて外部機関を交えた支援会議等、チームを組んで早期対応に心掛け、継続して対応に努めた。その結果、欠席傾向にある中で、学校へ気持ちに向ける生徒、登校機会を増やす生徒、校内中間教室や相談室を足がかりに登校状況が回復する生徒が増えてきている。 小中が連携して学習や学校生活、支援形態のスムーズな連結を図るとともに、児童・生徒の情報交換を密にして個別の支援計画を整備し、チームによる支援に一層努めていく必要がある。
長野	長野県長野養護学校	生徒が社会人として主体的に生きることをめざす高等部の課題学習のあり方 ～主権者教育に視点をあてて～	<ul style="list-style-type: none"> 主権者教育を行うために以下の点に留意して学習を組み立てた。 自ら経験したことのある体験(生徒会選挙)からの学習のスタート クイズやイラスト、体験活動などとした、生徒が身近で親しみやすい学習内容 長野市選挙管理委員会や信州大学の学習への協力 主権者教育を行った具体的成果として以下のものがあつた 18歳となり、選挙権を得た生徒が有権者の一人として衆議院選挙、長野市長選挙に足を運ぶ姿 保護者にも授業の様子を伝えたり啓発活動を行ったりしたことにより、『代理投票の制度をお願いして投票しました。自分から「選挙に行く」と言ったのが嬉しかったです』といった声を寄せていただくといった、家庭と学校相互の連携をはかることができた
岐阜	岐阜市立岐阜小学校	よりよい社会の実現をめざす子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが社会とつながるためには、子どもが社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材が大切である。中でも、地域素材を活用した授業を行うことで、子どもたちは今日的な社会の課題に対して、多角的に考えながら、意欲的に追究を行うことができた。また、よりよい社会生活へ生かそうとする態度を育てることにつながった。 子どもが、社会的事象の見方・考え方を働かせられるような単元構成の工夫を行うことで、学びに向かう力を高めることができた。 1単位時間の後半に、立場や事象を変えたり、自分との関わりを考えたりできる問いを教師が投げかけ、思考を再構成させることで、子どもたちの深い学びにつながった。
岐阜	岐阜市立徹明さくら小学校	発達の段階に応じた必然性のある対話的な学び ～『アゴラ』(「アクティブ・ラーニング」ルーム)の活用～	<ul style="list-style-type: none"> 対話的な学びとして、低学年は「伝え合う」ペア交流、中学年は「練り合う」生活班での交流が有効で、高学年では任意の小集団で「つくりだす」目的で位置付けると効果が大きかった。 児童にとって必然性のある対話になるように、問題意識の生み出し方(単元構成・課題化・発問等)を工夫することができた。 児童一人一人が(どの子も)自分の考えをもった上で対話できるように、考えを可視化して指導・援助を行うことができた。 ホワイトボード等の学習環境を整備し、『アゴラ』(「アクティブ・ラーニング」ルーム)を有効に活用することができた。 職員が主体的・対話的に研修を行い、アクティブ・ラーニングの在り方について学び合うことができた。 ▲今後は、児童にとって解決する必然性のある問題だったかを検証し、学びの積み重ねができるよう、日常の指導を大切にしていける。
岐阜	瑞穂市立牛牧小学校	生き生きと追究する児童の育成 ～次期学習指導要領の趣旨を踏まえた生活科と理科の指導を通して～	<ul style="list-style-type: none"> 求められている3つの資質・能力からみた児童の目指す出口をイメージしたことで、目指す児童に向けて具体的に目標をもって指導できた。 理科の「見方・考え方」が何に当たるのかを教師が捉えながら、授業を行うことができた。 教師が準備した物ではなくて、子どもが準備した物や思いついた物、発想した実験方法で追究できているため、見いだした問題に対して意欲的に解決していこうとする姿につながっている。 仮説の時間が十分あるので、ほぼ学級全員が実験方法まで考え、条件統一の視点で捉えようとしている。(5年) 終末事象提示により、学習したことを他の事象や生活の場面に生かすことができる児童が増えているため、考察中にも生活に結び付けて考える児童が増えた。
岐阜	海津市立城山小学校	子どもたちにとって、楽しくよく分かる授業づくり ～地域やPTAとの連携を図り、校区・学校の資源を活用することで～	<ol style="list-style-type: none"> 児童の変容 <ul style="list-style-type: none"> 「授業がよく分かる」「学校が楽しい」という児童が多くなってきた。→不登校0(ここ数年間) 自分のことを肯定的にみる児童が増えてきた。 地域行事に参加する児童(92%)、地域の方とのふれあいが多く感じる児童(86%)が増えてきた。 保護者の変容 <ul style="list-style-type: none"> 学校への信頼や期待は高くなってきている。 学校職員は、分かりやすい授業を行っている。(89%) 学校は、地域人材活用や地域行事参加、通信の地域回覧を通して、地域との連携に努めている。(93%) 地域の変容 <ul style="list-style-type: none"> 学校のことがよく分かるようになったという声が聞かれるようになった。 子どもたちのためならということ、学校の要望に応じてくれるようになった。
岐阜	岐阜県立岐阜工業高等学校	IoT技術をより身近に！ 無線ネットワークWiFiを使ったハードウェア制御教材の開発と指導法の研究 ～IoT技術を取り入れた実習教材を開発し、生徒がより主体的に楽しく最先端技術を学べる指導法を研究する～	<ul style="list-style-type: none"> 研究の成果 IoT技術が身近であると感じた生徒が、学科在籍生徒の80%を超えた。特に深く学んだ2・3年生の割合が高く、95%を超えた。 授業や課題研究、部活動においてRaspberry PIやMESH、Pepperを活用しており、これらを連携させたアプリ開発が可能になった。 CAD/CAMシステムを活用し、コンピュータで回路設計・パターン設計を行い、はんだづけやプログラムを行うなど総合的な組込みシステム技術を習得した。 今後の課題 プログラムは難しい、という先入観があり、初心者でも親しみやすい教材を研究していく。 スマートフォンやタブレットなど広く普及しているデバイスから、ハードウェア制御ができる方法について研究していく。 研究内容について研究収録や発表などで広報をしていく。
岐阜	岐阜県立岐阜聾学校	ICTの観点からみた聴覚障害のある生徒への具体的な実践の一考察 ～支援ツールとしての「手話」の効果的導入を考える～	<ol style="list-style-type: none"> 聴覚障害のある生徒への「手話」の効果的導入のあり方について、全職員の問題意識を高めることを目的とした校内研修を行う計画を立てた。聴覚障害者の教職員と管理職、職員代表のパネルディスカッションという形式で『手話』の効果的導入について自由に討論をした後、参加者の質疑応答を行い、最後にまとめるという内容である。 授業を公開し、参観者による指摘を受け止めて資質を高めるための「授業研究」の中の手話に関する記述において、当論文を参考にして支援の方法について具体的に書くようにした。この過程で、教職員が手話に対する自らの認識の程度を自覚し、自己課題を明らかにすることが期待される。 手話通訳のポイントを説明したビデオと書籍を購入し、教職員が学習できる環境を整えた。手話のポイントを学習することにより、授業での手話を用いた支援ツールの質を高めることが期待される。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

静岡	静岡大学教育学部附属特別支援学校	教員自らが主体的、対話的に取り組み、深い学びを得る校内研修 ～「効率的」で「効果的」な授業づくりをめざして～	・各話し合いの場面でグループワークを行い、全教員の意見が求められたことで、教員一人ひとりが自身の課題を意識し、結果、新学習指導要領や関連図書を読み込む教員や他校の研究会等に参加する教員が増えた。 ・全員で作上げた話し合いの書式ツールだからこそ、互いに課題点が言いやすく、来年度以降の改善につながった。今後、さらに話し合いを進め、より使い勝手の良い書式にしていこう。 ・研究として設定された時間以外にも、研究部以外の教員を交えてちょっとした話し合いが行われる場面が増えた。教員全員が教育研究に参加できたこと、結果、研究部のみにかかっていた負担が減った。
静岡	静岡市立清水江尻小学校	自己肯定感を育み・支え・深める「江尻流コミュニティ・スクール」の取組 ～重点目標の達成を目指す学校・家庭・地域の連携～	1. 子どもたちの学びの充実 地域の方々との交流・会話や、充実した体験活動を通して、子どもたちは明るく前向きな気持ちで学習に臨み、実感を伴った学びの経験を重ね、自信を深めることができている。 2. こどもたちの自己有用感の醸成 子どもたちの地域への関心・愛着や貢献意識が高まり、地域の行事への積極的な参加等を通して、自分たちも地域のために役に立てるといふ自己有用感が少しずつ醸成されてきている。 3. 学習環境の改善 教育活動をよく知る関係者が、学校運営の基本方針を承認し、実効性のある学校関係者評価を行うことで、学校運営の質の改善につながり、子どもたちが安心して自己発揮できる学習環境が整ってきた。
静岡	浜松市立伊目小学校	子供の良さを認め自尊感情を高める全校での取り組み ～小さな親切運動・新聞投稿など公に認められる活動を通して～	・児童会の「ゴミ運動」が12月21日に「小さな親切」運動本部から表彰された。 ・新聞に採用され公に認められることで自尊心が高まった。 ・新聞投稿が各学年で定着した。12月までに採用された本数 1年3本、2年7本、3年17本、4年8本、5年24本、6年50本 ・子どもの良いあらわれを表彰する「伊目っ子賞」への推薦本数が飛躍的に増えた。 ・「なかよしカード」により、子どもが互いの良い面を認め合うことができた。 ・子どもの良い面を積極的に見つけ認められる教員が増えた。 ・保護者との面談で、具体的な良い現れを伝えることで信頼関係を構築できた。 ・子どもの良い行いを認め、校長室の写真にシールが貼られている割合(12月現在) 1年25%2年25%3年73%4年40%5年88%6年85%全体57%
静岡	静岡県立静岡中央高等学校	高等学校における「通級」指導のあり方 ～通信制高校における「自立活動」の取組～	今回の研究により、特別な配慮を必要とする生徒の支援には、指導計画の作成、実際の支援、事後の振り返りなどを繰り返していくことで、一定の成果があがる事が確認された。通級指導における「自立活動」を通して効果が得られた指導・支援の形を、通信制教育の様々な場面で実践・継続をしていく必要がある。各教科における「合理的配慮」とともに、長期的な視野に立った指導・支援が必要であることがあらためて確認された。次年度以降、「合理的配慮」を実践していくために、生徒への声掛けやレポート添削における用語の使い方など多くの示唆を得ることができた。
愛知	春日井市立鳥居松小学校	だれもが「安心」できる学校をめざして ～児童・教師・保護者・地域みんなが「安心」できる学校をめざして～	1 わかりやすい授業づくり ・教育のユニバーサルデザインを考えた学習指導や学級経営について研修を深めたことで、全ての児童が「わかる喜びを感じる授業」に近づけることができた。 ・短時間学習の時間を活用して、日々の繰り返し練習や確認テストなど継続して取り組んだことで、基礎基本の習熟を図ることができた。 2 心の教育の充実 ・特別の教科道徳の授業づくりと評価の確立をめざして、校内研究授業の積み重ねと校外研修活動を行って力量向上を図ったことで、「考え議論する道徳」の実現に向けた主体的・対話的で深い学びとなる授業を実践することができた。 3 特別支援教育の充実 ・支援学級と通常学級の児童が交流する場を学習や学校生活の場面に積極的に設定することで、支援学級児童が安心して学校生活を送るとともに、通常学級児童とともに学び合うことができた。 4 家庭・地域との共育 ・スポーツ祭典や餅つき大会など保護者・地域と協力して様々な事業を行ったり、地域の人材を活用したりすることで、学校が行う教育活動への理解を一層深め、保護者・地域が安心して学校と連携することができる環境を整えることができた。
愛知	あま市立甚目寺小学校	人とのかかわりを大切に、進んで行動できる児童の育成 ～ESDの視点に立った教育活動「ふるさと甚目寺 かかわる つたえる つながる」を通して～	・能力毎に各学年でめざす力を整理し、到達目標を体系化した「聞く・話す・話し合う能力チェック表」を作成したことにより、各学年で、どのような力を付けさせていきたいかが視覚化され、それらを意識した授業づくりを進めることができた。 ・インタビューの仕方を扱った国語の単元では、各授業時間においてわかったことやできることまたまだできていないところを振り返らせることで、実際のインタビュー活動に向けてどんなことをしていけばよいか考え、実践させることができた。 ・各学年のESDテーマに則って、出前授業や地域での校外学習を積極的に行った。事前に学習した事柄から多くの質問を考え、興味深く話を聞いた上で、聞いたことや調べたことで疑問に思ったことについてのやり取りをする姿が見られた。
愛知	岡崎市立愛宕小学校	プログラミング学習による主体的で対話的な深い学びの実現	・教科のねらいに則したプログラミング学習を実施することで、新学習指導要領の主旨である「対話的・主体的な深い学び」を実現できるようになった。教師の指示を少なくしてプログラミングの活動時間を確保したことで、児童同士で課題を解決していく授業を展開するようになり、児童が「学び」に積極的に関わる姿が増えた。 ・授業展開において、児童のプログラミングの活動の時間を確保して活動を児童に任せることにより、教師の指示が的確になり、教師は児童同士の対話重視の授業を、普段の授業でも行うようになり、授業改善が進んだ。 ・例えば6年算数の速さや割合を学ぶ単元では、自走ロボットを動かして、速さや距離などを測定しながら、計算と実測が合致するかどうか調べる授業を行った。従来の教科書、ノートの授業に比べ、児童同士で計算の仕方を教えあいながら計測した。これにより、測定値が計算値に近いことで、学習の喜びを児童同士で分かち合い、学習のモチベーションが上がり、継続することができた。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

愛知	西尾市立中畑小学校	地域を愛し自然を愛する心豊かな子どもの育成 ～豊かな自然環境と教育資源を生かした教育活動～	校区を流れる一級河川「矢作川」の豊かな自然環境と、教育活動に協力的な地域の教育資源を生かした実践に取り組んだ。地域の方に指導をいただきながら行ったサツマイモの栽培や米作り、親子で取り組む地域の用水路での小魚を捕まえる体験活動や矢作川での魚釣りなどを本年度も実施することができた。さらに、4年生は矢作川に関連した学習を深め、助成金を活用して、矢作川の源流地の一つである長野県下伊那郡根羽村を実際に訪ね、村役場の方や現地の小学生との交流活動を行うことができた。これらの実践を通して、本校区の豊かな自然環境や子どもを中心に巻き巻き家庭・地域の素晴らしさを再認識した。今後もこれらの環境を生かし、地域を愛し自然を愛する心豊かな子どもの育成を目指していきたい。
愛知	長久手市立南中学校	自分の考えに自信をもち、学びをつなごうとする生徒の育成 ～気づき、深化、つながりを意識した授業を通して～	各教科で見方・考え方をもとにした3つの学びを意識した授業を行った。 「気付く学び」では、日常に基づいた身近な題材を取り上げ、そこから課題を練り上げることで、子どもの知的好奇心を揺さぶり主体的に学習に臨む姿が見られるようになった。 「深化する学び」では、全ての学習で話し合いの進め方を統一した。話し合うことで新たな考えを構築する姿が見られた。教師の発問の工夫により、話し合う必然性をもたせ対話を促すことができた。 「つなげる学び」では、本時の課題に対して振り返りを行った。振り返ることで自らの成長を感じることができた。さらに、学習した内容を他の教科や日常生活につなげることで、学習の意義や目的を意識することができた。 研究を行ったことで、生徒が主体的に活動し、様々な場面で自らの考えを表現する姿が多く見られるようになった。
愛知	稲沢市立稲沢西中学校	未来を切り拓き、創造するための資質・能力の育成 ～「何を学ぶか」を主体的に捉え、学びを深める授業を通して～	①実践前後で生徒の「受動的な授業」が減少した(P<0.05)。さらに、「話し合いは好きだ」「話し合いは役に立っている」と感じる生徒が増えた(P<0.05)。これらの結果から、2年間の現職教育の取組により、本校全体の授業形式がALを生かした学習活動へ移行したと考えられる。 ②「自分の考えをまとめようとする」生徒が増えた(P<0.05)。道徳では「ポートフォリオ」、数学科では「リフレクションカード」、保健体育科では「学習カード」など、学びを振り返る時間を定着させられた。 【課題】 H29年度からH30年度にかけて、「単元のつながり」をもって学習に向かう生徒が減少してしまった(P<0.05)。教師は単元の見通しを立て、生徒が学んだことを「広げていく」「活用していく」意識をもてるように単元構成や授業を工夫することが必要である。
愛知	岩倉市立南部中学校	知をひらく	研究の成果 ○ 交流活動を日常的に行う中で、互いに温かく声かけを行い、自分から「わからない」と言える生徒が増えた。生徒の学び合う姿勢が身に付いてきて、全員参加の授業を保障することができた。 ○ 教科部会で指導理念(教科の本質・育てるべき資質能力など)に基づいて授業を構想し、学年部会では学級の中で生徒が安心して学べる人間関係が構築されているかという視点で協議する。さらに全体会で共有、検証、実践というサイクルが定着し、螺旋状に研究を深めることができた。 今後の課題 ○ 深い学びに向けて、評価の方法も考えながら、さらに研究を深めたい。
愛知	扶桑町立扶桑北中学校	生徒をとらえ、よさを伸ばす「特別の教科 道徳」の追究 ～考え、議論する道徳の授業づくりを通して～	【成果】 ・生徒が道徳の授業に前向きに取り組むことができるようになった。 ・生徒の振り返りに、道徳の授業で学んだことを自分の生活と関連させて考える記述が見られるようになってきた。 ・道徳の授業で仲間の発言を傾聴したり、自分なりの言葉で考えを伝えたりすることができるようになってきた。 ・道徳バトントレーを積み重ねたことにより、道徳の授業への教師の意識が高まり、教材分析など教師の指導力の向上につながった。 ・「道徳の勉強はためになると思うか」というアンケートに対し、肯定的な回答をした生徒が、研究当初と比べ、約10%上昇し、全体の80%以上を占めた。 【課題】 ・道徳教育全体計画の別業を生かした、全教科・全領域での道徳教育の取組をより一層展開していく必要がある。
愛知	愛知県立小坂井高等学校	高等学校普通科におけるキャリア教育の取組	本稿では、本校が実施しているキャリア教育関連の主な取組と成果を紹介している。特色ある取組の一つとして、平成28年度から1Dayインターンシップに取り組んでおり、進学に力点を置いた指導に加え、職業を通じて社会の一員として貢献する視点を持つことができる指導への転換を図ってきた。 その成果は、生徒が上級学校を卒業し、社会の一員として自立する数年後以降に出てくるものと考え、アンケート結果等から5年後、10年後の将来の在り方・生き方を主体的に考えられるようになっていくことがわかる。本校の取組によって、生徒は社会生活や職業生活の一部を体感することにより、将来の展望と目的意識をもって学習に向き合っていることが見出された。
大阪	堺市立浅香山小学校	豊かな心をはぐくみ、自他ともによりよく生きようとする児童の育成 ～道徳科の授業の充実をめざして～	・教員の日々の道徳科の授業における意欲が以前より高くなり、学年を超えて道徳科について話す機会が増えてきた。 ・内容項目や学年、1回1回の授業のつながりを意識して授業づくりを行うようになってきた。 ・大まかな授業の組み立て方(読み物教材)の方法が具体的にわかり、自信をもって授業に臨めるようになってきた。 ・児童が道徳の授業を楽しみにするようになってきた。 ・評価について具体的な中身についてはまだまだ勉強の余地はあるが、1時間内で児童の変容を意識して記録するようになってきた。 ・普段の子どもの学校生活と道徳科の授業を子ども自身がつなげて考えるようになってきた。 ・毎回の児童の学びを記録することで、評価に生かすだけではなく、評価した内容を次の授業の指導につなげる必要性和重要性がわかった。 ・ねらいと発問、活動の精選は、他教科の授業づくりとの大きな共通点である。道徳の授業づくりで培った教材研究と発問づくりのプロセスが他教科の授業づくりにつながっている。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

大阪	大阪市立梅南津守小学校	2校が統合した4年間の学校づくり ～きらりと光る子ども、学校、教職員、地域をめざして～	①たて割り班での主な活動 ②ICT活用事業 ・タブレットPCなどの整備とICTを活用した授業の研究を深めることができた。 ③プログラミング教育の実施 ④スポーツ好きにする取組 ・全国体力運動能力、運動習慣調査において、本校は、創立以来、ほぼ全種目で全国平均を上回っている。 ⑤福祉をはじめとする様々な体験学習の実施 ・児童と保護者アンケートの結果も、「子どもが学校が楽しいと感じている。」「学校は、保護者や地域の願いを受けとめている。」などの項目で肯定的な回答が多い。この4年間の学校づくりが、評価されているものとする。今後、さらに自信をもって梅南津守小を「きらりと光る学校にする教育活動」を推進したいと考える。
大阪	大泉学園	自立を促す小中一貫教育のあり方 ～キャリア教育を軸に～	・教育目標を「夢にむかって自分らしく輝く子の育成」と定め、「学力向上」「心育て」「キャリア教育」の3本の柱で9年間を見通した様々な取り組みを実践してきた。 ・キャリア教育を広い視点でとらえなおし、すべての教育活動の中に潜んでいるキャリア教育についての価値を見いだしていく中で、キャリア教育を軸にした教育活動を進めた。 ・全国学力学習状況調査等の結果においても学力・心ともに向上した。 ・キャリア教育は、自立に向かうエンジンとなり、モチベーションが高まり、意欲的に授業を受け安心して過ごせる学校になった。
大阪	大阪市立中大江小学校	児童が主体的に関わり創造していく学校自然環境カリキュラム ～共生・活用型自然環境への校内整備に伴う児童の意識変化～	本実践では、児童自ら自然環境構成を図ることのできる単元・カリキュラムを実施することで、自然環境に対する意識を高めることができた。また、生活の中から課題を見出し、解決に取り組むことで、「大阪城公園でしか見ることができなかったムラサキシジミを、学校に呼ぶことができたよ。」「もっと虫がたくさん集まる学校にしたいね。」と、自分たちが生活する自然環境の在り方を考えていくきっかけになった。こういった姿は、生涯学習の出発点になっているとも言える。今後は、各学年のつながりを考えたり、Society5.0の時代を見据えてSTEAM教育も取り入れたりしながら、さらに大きな視点でカリキュラムデザインへとつなげていきたい。
大阪	吹田市立江坂大池小学校	二つの小中一貫教育の実践から ～憧れで育てる9年間～	・小中学校で連携を深め、9年間一貫した教育を進めることは、児童・生徒の継続した学びや育ちに、継続的・系統的に指導や支援を行うことができ効果的である。 ・小中で連携をとることで、生徒指導上の課題や家庭的な課題等の把握を行う上で効果的である。また、連携して家庭へ働きかけることにより、生活習慣の改善や家庭支援を行うことができ、結果として不登校や問題行動、虐待等の未然防止や早期対応が行えた。 ・学習のスタイルの共有やシンキングツールを使った授業改善などについて9年間を通じて行うことは、児童・生徒にとっては、学年変わり、中学校への進学時、担任や担当教員が変わることへの不安や戸惑いを軽減することができた。今後、成果を生かして、学力向上を図りたい。
兵庫	兵庫県立西脇高等学校	高等学校と小学校の接続の具体とその成果 ～理科好きな高校生を育てるために～	高等学校の自然科学研究で成果を得る生徒は、小学校の教師が自分と「不思議」を共有し、「なぜ」を大切にしてくれたという共通の経験をもつ。小学校時代の解決できなかった「不思議」を忘れずに、高校で時間と場所を与えられて、小学校時代の疑問に取り組む。しかし、小学校の理科実験の授業を見ると、「どうすれば」教科書通りの結果を出すことができるかに関心が集中しており、子どもの「なぜ」に取りあっている余裕はないように見える。子どもは自然科学にとって大切な「なぜ」から離れ、「どうすれば」成功できるか、点数がとれるか、という発想に縛られていく。これを理科離れというのであろう。教師は質問されて「わからない」と答えることに抵抗感をもつが、これから求められるのは、子どもの質問に答えられる教師ではなく、身のまわりの不思議を子どもと共有できる教師である。多くの小学校の教育現場に足を運んで教師と議論した経験をもとに、新学習指導要領の考え方に基づいた「なぜ」を重視する授業に向かう必要性と方法を、冊子「小学校の先生のためのー多忙な日々の中で子どもの理科離れを防ぐヒント」にまとめた。250部印刷して、希望する小学校に無償で配布した。
奈良	奈良市立一条高等学校	SSS(スーパースマートスクール)の創設 ～アナログとデジタルの最適な共存～	○”ヒト”(アナログ)と、ICT(デジタル)を効果的に組み合わせ「スマートスクール(ICT機器を活用する学校)を超える「スマートスクール(SSS)」を目指しています。 ○校内Wi-fi、プロジェクターをすべての教室に設け、教員にはタブレットを貸与、生徒端末はスマートフォン(BYOD)を活用しています。2年間(2016～17)、(株)リクルートマーケティングパートナーズ(RMP)、奈良教育大学、奈良市・奈良市教育委員会が、SSS開発のため産官学連携協定を締結しすすめてきました。現在は、授業、評価、情報共有(教員)をはじめ、ICT活用ツールとしてC-learning(Netman)やClassi(Classi)などを利用しています。 ○主体的、対話的で深い学びの実践をつうじて、フロンティスピリット(=開拓者精神・語り継がれる初代校長の開校式(1950年)での言葉)を携えて社会で活躍できる人を育てています。
奈良	奈良市立都祁中学校	コミュニティ・スクールを核として学校課題の解決をめざす取組 ～地域連携を学ぶ意欲につなげるために～	1、平成30年度全国学力学習状況調査では、「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に77.5%、「地域の人と関わったりする機会がありますか」の質問には87.5%の肯定的な回答があった。地域連携を進めていく過程で、子どもたちは活動の具体的な計画を立て、それに向かって進んでいく力を身に付けてきた。振り返りからも、ふるさとに誇りと喜びの感じられる生徒の意識が大きく芽生えていることがうかがえる。 2、開かれた学校づくりは、生徒、家庭、地域の意識変化だけでなく、教職員間の連携をより強固なものとし「学力向上」「学校運営」に向けての共通実践が確かなものになっていった。 30年度全国学力学習状況調査ではすべての教科で全国、県の平均値を上回り、過去3年間の調査と比べ、大きく学力面での向上が見られた。地域連携活動等での肯定的認知が学習意欲へも繋がったと考えられる。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

奈良	広陵町立広陵西小学校	主体的に学ぶ子どもの育成をめざして ～新学習指導要領のスタートに向けて～	学校が進んでいくべき道を学校評価や教職員の声、自分の考えから方向付けをする1年として学校経営を進めてきた。学校や教員の一方的な経営方針でなく、子ども達の考えている学校の理想像も追求していこうとした。2年目には少しでも前進させていけるように具体的な目標を掲げた。 成果 ・子ども達の意識や教員の意識を高めることができた。 ・目の前の学級の子もだけでなく、学校全体を変えていきたいという議論ができるようになった。 課題 ・校長が描いているように順調な学校経営は難しく、まだまだ教員の意思統一が必要である。ただ、リーダーシップを取る教員を育て、学校の進むべき方向性を共有することが大きな舵取りとなった。 ・校長の学校経営で学校は変わると信じたいが、人事異動のサイクルが早く、同一校で3年は勤務させてもらいたいというのが正直な気持ちである。
鳥取	鳥取市立岩倉小学校	互いの考えや思いの交流を通して、学ぶ楽しさを実感する授業づくり ～高め合う学年集団作りを基盤として～	成果 ○友だちと話し合い、問題を解決することが楽しいと感じたり、いろいろな友だちと学ぶことで知識が広がったりすることで、学習に前向きに取り組む児童が増えた。 ○一人で考えてできなかったことも、友だちと一緒にやることで自信をもってできるようになり、学習中に積極的に発言する児童も増えた。 ○学年で子ども同士の横糸をつなげる取り組みをする中で児童の横糸だけでなく教職員の横糸もつながり、全校が一丸となって進める研究となった。 課題 ○児童同士で声を掛け合い、自治的にルールを徹底できるようにしたり、リレーションを深めたりできるようにするために、教職員主導から児童が主体となって活動する場面を増やすことが必要。 ○自治的なルールとリレーションの土台の上で、より子どもたち同士が友だちと関わり合いながら学習する楽しさを感じられるような授業づくりを進めていきたい。
広島	広島市立牛田中学校	中学校におけるインクルーシブ教育システム構築の試み ～ともに学び ともに生きる学校づくりを目指して～	1 研究の成果 (1) 生徒は、授業を中心とした仲間と聴き合う関係により主体的・対話的な学びを通して学校生活に前向きに取り組む姿勢が見られた。 (2) 5年前より「自分は周りの友達から認められている」で8ポイント伸びた。 (3) 全国学力・学習状況調査では全科目において、市・県・国の平均を上回りB問題が特に伸びた。 (4) 学習意欲の向上、不登校の減少、定期テスト等における30%以下の生徒が減少した。 2 今後の課題 (1) 教師は、生徒の自尊感情の高まりに繋げていけるよう、生徒理解に基づいた授業研究を深める必要がある。 (2) 生徒の実態把握から、困っている状況を探り、手立てを講じ、支援していくことを粘り強く積み重ねていく。
広島	広島市立温品小学校	人権が尊重される学校づくり ～「自尊感情の育成」を基軸とした人権教育の推進を通して～	1. 平成29年度から二年間かけて取り組んできた自尊感情の育成は、主に「1包み込まれ感覚」と「3役立ち感」において向上が見られた。 2. 算数科における「学習意欲」については、五学年(1年生を除く)中、三学年が、5月当初よりも向上していた。 【研究の課題】 1. 昨年度の研究テーマは、「対話的言語活動を通じた、「分かる、できる」算数科の授業づくり(1年次)」であったが、「2つながり感」は全体的に向上が見られなかった。課題として、児童が考えたくなる、あるいは話し合いいたくなるような「切り返し発問」ができていなかったこと、形式的な話型による対話のマンネリ化などが原因と考えられる。 2. 自尊感情の肯定的評価は高くなってきているが、期間を空けて算数科の学力を測ると、3観点(【考え方】、【技能】、【知識・理解】)の定着率が落ち込んでしまっているのも事実である。これは、そのとき学習した内容は覚えているが、時間がたつと忘れてしまうことを意味し、家庭学習の習慣が身につけていない児童ほど、顕著に現れていた。
徳島	吉野川市立上浦小学校	NIEで育てる言語能力	・具体的思考から抽象的思考への発達への壁である「9歳の壁」を越えるために必要な「二次的なことば」(学習言語)を獲得させるために、他者に説明する文体で書かれた新聞を使った学習(NIE)に取り組んだ。活用力の低下に歯止めがかかるとともに、月刊の児童文誌に掲載される数が増えたり、一定時間内にかかる文章量が増加したりするなど、書きことばの習得が進んだと考えられる。第6学年では、新聞を週に1～3回読んでいる児童が28.6%から78.6%に増え、毎日読む児童も14.3%いる。難しいことばの意味を前後の文脈から推測して文意をとらえたり、知っている言葉を手掛かりに英訳された新聞記事の内容を推測したりする習慣も育ってきている。

香川	高松市立東植田小学校	児童が主体的にかかわり、学び合う力の育成 ～タブレットPCを活用した「共有と比較」の授業スタイルの確立と、家庭学習との連動を通して～	<p>(1)「共有と比較」の授業スタイルを確立し、主体的なかかわりを引き出す授業改善について</p> <p>①「協働学習支援ツール」を活用した各教科の授業研究</p> <p>児童</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットPCを活用することで考えが可視化され、それを基に比較するなどの活動を通して主体的なかかわりが生まれた。 ・自他の考えの比較が比較的容易にできることで、友達の考えに対する関心も高まり、考えを聞いてみたい相手と自然に交流する姿が見られた。 ・いろいろな「協働学習支援ツール」の機能を、児童が繰り返し活用することにより、児童の情報活用能力が高まった。 <p>教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを繰り返し活用していくことで操作に慣れ、有効性の実感も伴って、積極的に活用していこうという意識が高まった。 ・いろいろな「協働学習支援ツール」の特徴を各教員が理解し、それを生かして日常の授業においてもICT機器を効果的に活用するようになった。それに伴い、タブレットPCの効果的な使い方を検証する上で基となる実践例が増えた。 <p>② 対話や深い学びを引き出す言葉の設定と運用の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学び合いの中で思考を深める手がかりとなる言葉」(例「違いは…」「例えば…」等)を、教師から一方的に与えるのではなく、授業の中で子どもから出てきた言葉を価値付けていきながら見つけていくことができた。それによって、分析・比較などの「類別思考」、因果・結合・総合などの「関係思考」、観点変更・構想・適用などの「条件思考」の言葉を、低・中・高学年の系統性を考えて設定することができ、論理的思考の育成に寄与した。 ③ 発話量チェックのソフト開発で、授業改善 ・「教師の発問」、「児童の発言」、「対話や深い学びを引き出す言葉」の3つの観点ごとに、授業の時間軸に沿って発言を打ち込み、観念の言葉の出現率を円グラフに表すことができるソフトを開発した。授業後の研究協議では、「対話により深い学びが生まれたか」などを客観的に捉えることができ、教師がしゃべり過ぎないこと等を実感するよい機会となった。 <p>(2) 確かな学力を育む家庭学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットドリルを活用した家庭学習については、週に1回、どの学年も持ち帰り学習を進めている。10の約束を事前に決めていたので大きなトラブルは起きず、答えも自動的にすぐ分かるので、児童は喜んで学習をしている。
福岡	北九州市立今町小学校	よりよい人間関係を形成する特別活動の研究 ～対人スキルを日常化するためのカリキュラムづくりを目指して(2年次)～	<p>○研究の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高学年や6年生が対人スキルに関する内容をDVDにして、全校児童に呼びかけることができたことは効果的であった。教師ではなく、児童が主体的に取り組むことができていた結果である。 ・社会性を育てる一つの方策として、縦割り活動を多く仕組みたことで、6年生が下級生の手本となる姿が見られた。あいさつやケンカの仲裁、思いの伝え方など、対人スキルで学んだことを生かす場面があった。 ・価値付けに使用したポスターを掲示することで、児童のよりよい姿を価値付けやすくなった。児童が常に目につく場所に置いたことでも、意識しやすいのでよかった。 ・対人スキル通信を家庭に向けて配布したのは、家庭生活に繋げる意味でもよかった。 <p>●今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対人スキルの価値を、児童がどのように理解し、継続して実践できているかが分りにくかった。アンケート等で、児童自身が価値の定着を振り返る時間が必要。 ・日常化・定着化に向けた、学級指導後の実践が少なかった。教師の声かけのみになっていた。 ・評価基準・手立てを教師間で確実に共有することが必要である。 ・学校の中でできていることを社会生活・家庭生活にどのように繋げていくか。また、どのように評価していくか。
福岡	北九州市立門司中学校	活用力・表現力の育成をはかるICTを活用した指導方法の工夫	<p>1. ICT機器を活用した授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科、道徳、総合的な学習の時間において、タブレット端末を利用した授業実践を行った。 <p>2. 実践交流会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科、音楽科の2教科で公開授業を行う。理科は「電流とその利用」の単元で、実験方法の視聴、実験結果の記録、考察等にタブレット端末を活用した。音楽科は「日本の伝統音楽に親しみそのよさを味わおう」の題材で、伝統音楽の視聴や意見交流の場面でタブレット端末を活用した。 ・分科会を開催し、各教科で実践した取組において、タブレット端末を利用した授業のねらい、ICT機器の活用場面、生徒の反応、活用した成果と課題などについて実践報告を行う。また、参観者が実際にタブレット端末を体験する模擬授業の分科会も設定した。 <p>3. 実践授業のまとめと発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践授業を実践事例としてまとめ、教育委員会の教育イントラナビで閲覧できるようにし、実践授業を北九州市内の学校へ発信している。
福岡	岡垣町立岡垣中学校	発達段階に応じた系統的なキャリア教育の推進 ～新しい視点に立ったキャリア教育9年間のカリキュラム開発を通して～	<p>岡垣中学校校区の3小学校と連携し、9年間を見通した効果的なキャリア教育の実践に取り組み、多くの成果をあげることができた。その中でも「キャリア教育を充実させるための改善・実施・評価シート」の取り組みでは、「<u>基本的・汎用的能力</u>から見た改善」と「<u>小中連携</u>」の立場から見た改善を本研究の重要な柱として実践的な研究を進め、以下のような教育効果があがった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「<u>基本的・汎用的能力</u>」から見た改善を考えることで、これまでの実践にキャリア教育の視点をとり入れることができた。 ○「<u>小中連携</u>」の立場から見た改善を考えることで、小中のつながりを意識しながら授業を構想することができた。 ○次なる一手を考えることで、PDCAサイクルを機能させることができた。 <p>今後も各実践に改善を加え、「キャリア教育を充実させるための改善・実施・評価シート」にまとめることで、キャリア教育の充実を図りたい。</p>

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

福岡	中間市立中間南中学校	自らの考えを確かに表現する生徒の育成 ～共感的交流活動を位置づけた学習課題を通して～	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○共感的交流活動を取り入れることで、自分の考えを伝えた時に認めてもらう喜びを感じたり、他者の考えとの違いに感心したりすることができた。 ○共感的交流活動を仕組むことで、課題解決の過程において、他者へ筋道立て説明することで知識及び技能の習得も確実にできた。 ○相手の考えを最後まで聞き、自分の意見を相手に伝えようとするなど、自分の考えを表現する意欲が高まった。 ○自分の考えをまとめて書いたり、思考、判断したりする力が伸びた。 ○小集団での話し合い活動をした際に、研究以前と比べ生徒たちは間違いを恐れず、自分の考えを伝えようとしている様子が見られた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●すべての教科において思考力、判断力、表現力が向上したとは言えない。 ●発問において、(考えさせる内容)と(考える方向性)を示したが、焦点化した話し合いにならない場面があった。
福岡	芦屋町立山鹿小学校	生涯を通じて、よりよい健康な生活を実践する健康教育のあり方 ～体育科(運動領域・保健領域)を中心とした指導の工夫と日常活動の取組を通して～	<ul style="list-style-type: none"> ○体育(運動領域・保健領域)の学習と道徳や特別活動の時間を関連づけることで、自分が健康であるためには、基本的な生活習慣(食事、睡眠、運動)や親切な心、思いやりの心なども大切なことだと感じ取らせることができた。 ○健康な体づくりカード等に自分の取組を決めて実践させ、定期的に振り返りをさせることで、日常的に実践化を図ることができた。 ○学習したことを一つのファイルにまとめることで、健康について振り返ったり自分の心や体の成長に気づいたりすることができた。 ○学校だより等で、保護者へ啓発することで、連携した取組ができつつある。
福岡	直方市立直方西小学校	意欲的に学び自らの考えを伝え合う児童を育てる算数科学習指導 ～言語活動の充実を図った問題提示と交流活動の工夫を通して～	<ul style="list-style-type: none"> ○問題提示を、①解決の必要性、必然性がある問題、②児童自身に問いや疑問が生まれる問題、③興味・関心をもつ問題としたことで、課題設定を明確にした授業展開を果たすことができた。このことが、児童の学習意欲を高め、課題解決まで維持することにつながった。 ○交流活動において、交流の視点の提示、問いが連続する交流方法の設定、互いの考えが深まる交流方法について、授業実践を通して明らかになってきた。特に、算数科においては、操作的表現を言語的表現、図的表現を言語的表現、図的表現を記号的表現等の表現様式の組み合わせを授業設計に取り入れることが必要であると考える。
福岡	宮若市立宮田東小学校	基礎・基本を身につけ自ら書きすすめる子どもの育成 ～国語科における「書くこと」領域を中心とした単元構成の工夫を通して～	<p>本年は、国語科「書くこと領域」に校内研究の焦点を当て、「基礎・基本を身につけ、自ら書き進める子どもの育成」を研究テーマとし、様々な教科学習における協働の学習の場面でも根拠をもって自分の考えを伝え合うことができるように「書く活動」に重点を置いて取り組みを進めた。併せて校内研究において、電子黒板やタブレットPCを積極的に使用することで、職員全体でICTの良さを共有すると共に活用が広がっていった。その結果、平成30年度の全国学力・学習状況調査の国語のB問題では、多くの学年において「書くこと」に関する正答率が全国平均を超えるという結果を残した。</p>
福岡	鞍手町立剣南小学校	確かな読みの力を育てる国語科学習指導の在り方 ～「読みのわざ」を活かして読む説明的文章の指導の工夫を通して～	<p>(1) 着眼1 自分に必要な情報を叙述から見つける活動の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ サイドラインを引いたり、四角で囲んだりする書き込み活動を活かし、自分に必要な情報を見つけることができるようになってきた。 ○ 「読みのわざ」を学年間や単元間で系統性を持たせて整理し、該当学年で習得する「読みのわざ」を教室に常時掲示したことで、「読みのわざ」を活用する意識が高まった。 ● 「読みのわざ」の中から何をを使うか児童が自ら選択し活用できるようにする手立てを取る必要がある。 <p>(2) 着眼2 読みを確かなものにさせるための記述活動の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 記述活動を位置づけたことで確かな読みにつながり、自分の考えを持つことができるようになった。 ○ 本文から必要な情報を書き抜く際に、マス目の制限をしたり、問いにある言葉に着目させたりしたことで、必要な言葉を選んだり、必要に応じてどこまで書き抜くのかを判断して記述したりすることができるようになった。 ● 教師も児童も、記述活動の目的を明確にして取り組むこと。 ● 記述したことを交流してさらに読みを深めていくための教師の指導の在り方を明らかにすること。 <p>CRT学力検査の結果から 平成26年度末に実施したCRT学力検査の結果を受けて、本研究課題を設定し研究を進めてきた。その結果、2年間で、「読む能力」の観点からポイント上昇するだけではなく、4観点すべてにおいて上昇することができた。「確かな読みの力」をつけるために、「何を」「どのように身に付けさせるか」を職員で共通理解しながら指導した成果が表れてきていると考える。また、評定1の児童が減少していることから、「読みのわざ」を併せて教えることで、国語が苦手な児童が減少してきたと考える。</p>
長崎	時津町立時津東小学校	学びをいかし、自分の思いや考えを豊かに表現する東っ子の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○課題把握とそれに合わせた練習問題の整備により、重点的に指導する内容が明確になり、その手立てを立てやすくなった。 ○算数用語カードを児童が大切な言葉として認識して使うことで、簡潔、明瞭、的確な数学的表現ができるようになった。 ○交流の目的や視点を児童と共有することで、共通点や相違点に着目して話し合ったり、互いの考えから大切なことを見つけ出そうとしたりするようになり、「説明し合い」から「学び合い」に近づいてきた。算数科を中心に研究を進めてきたが、交流による「学び合い」は他教科の中でも見られるようになり、研究が日常の学びに生かされていることを実感している。 ○今後は、算数の研究を進める上で課題となった、問題を読み解く力の不足を解消するため、国語科を中心とした研究を進めていく。
熊本	上天草市立龍ヶ岳小学校	かがやく龍ヶ岳っ子の育成 ～自立心と豊かな人間性を兼ね備えた園児・児童・生徒の育成をめざして～	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園と小学校、小学校と中学校の連携した取組により、小1プロブレム及び中1ギャップの軽減・解消につながった。 ・朝食を起点とした食育に関する町内一帯となった取組により、どの校種でも朝食接種率が向上した。 ・保小中の発達段階に応じたUDの視点からの取組により、特性のある子どもたちが学びやすくなった。また、視覚的支援があることで、言葉での理解が苦手な子どもたちが抵抗なく行動できてきた。 ・小中学校教員の乗り入れ授業など学力向上の諸取組により、全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査結果から、着実に学力が向上した。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

熊本	甲佐町立白旗小学校	熊本地震からの心の復興を目指して ～災害時における「児童の心のケア」の一例～	平成28年度の熊本地震では、本校児童の1割強の児童が仮設住宅等から通学し、学校再開時には、4割の児童が心身の不調を訴える状況であった。児童の心のケアの重要性を感じ、実践をスタートした。 児童は、この地震で、多くの方に支えられていることを実感していた。そのことも踏まえ、児童の心のケアを進める上で ①講演会、音楽会等で児童が安心してできる場を提供すること ②自分たちが回りの人の役に立っているという自己有用感を育てていくことの2点で取り組みを進めてきた。児童は、特に仮設住宅の方との交流を続けることで、自分たちが役に立っているという実感を持った。そのことで、自主的に考え行動し、もし、次に地震があったらどうするかと防災教育の視点にたった児童が育ってきた。
鹿児島	鹿児島市立平川小学校	他者とのかかわりを大切に、豊かにコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して	相手意識を大切に、主体的に伝え合い、達成感を味わえる授業を行うために、児童が主体的に学習に取り組むバックワードデザインによる単元構成を行った。また、課題となっていた学年で統一されていない指導過程を、慣れ親しむことから伝え合いへつなぐ一単位時間の基本的な学習過程を策定し、共通実践及び研究授業を通して課題や成果を協議することで、学校としての基本的な単元及び一単位時間の学習過程を確立できた。 意欲を高め、授業の室を高めるために、児童が見通しをもち、意欲的な伝え愛を積み重ねることを促す評価の工夫を行った。 全校でENGLISH DAYを設けたり、全校外国語活動、音楽集会での英語の歌など場を設定することで、英語を全校児童・職員が楽しむことができた。 活動の様子を全学年・全単元・全校外国語活動の様子のパネルを作成したり、基本的語彙をカードやポスター等にして掲示する視覚的環境や英語での校内放送や発音コーナーなどの聴覚的環境を整えることで、学習や活動したことを視覚・聴覚でも確認したり、主体的に英語を使ったりする子供の育成ができた。 【課題】 2019年度は、2020年度からの全面実施前の移行期間最後の年にあたる。新しい教材を使用しているが、移行期間の評価の観点の踏まえつつ、新教材を児童の実態に合わせて使用することとして、新しい観点についても研究して行く必要がある。
鹿児島	南九州市立大丸小学校	対話的活動を通して、自己の変容を実感できる子どもの育成 ～複式学級における説明的文章を中心に～	・思考ツールが「対話的な学習」を促進する一つの手段となることが検証できた。 ・テーマ達成に向け、学習過程の工夫「大丸モデル」を構築できた。また、その成果も子どもの姿を通して検証できた。 ・言葉による見方、考え方を働かせるための一単位時間の学習過程を明らかにすることができた。 ・言葉による見方、考え方を働かせながら、新たな意味や価値を見出すことができた。 ・大丸モデルに基づき授業を展開することで、児童が見通しをもって主体的に授業に臨めるようになってきた。 ・間接指導の工夫を通して、児童の聞く、話す力が高まり、他の意見を受け入れて考えを深めていこうとする姿勢が高まってきた。 ・児童が自分の考えや思いを自信を持って表出できるようになってきた。 ・チーム大丸で研究を進めることで、職員の授業改善に対する意識の高まりや授業の質の向上に繋がった。また、共通した教具等の整備ができた。
鹿児島	出水市立鶴荘学園	9年間の学びをつなぐ義務教育学校の在り方 ～「つながる教育課程」と「つなげる力を高める学習指導」	○ 「つながる教育課程」とテーマを立てて、カリキュラム・マネジメントを行うことによって、前期課程(小学校課程)と後期課程(中学校課程)とをつなぐ教育活動を充実させたり、教科等間の関連を図り教育効果を高めたりすることができた。 ○ 「つなげる力」を高めるために、各教科等において実践的研究を行うことによって、思考力・表現力と対話を重視した授業改善を図ることができた。 ○ 特設教科「ソル科」においては、地域の教育資源を有効に活用したダイナミックな実践を行うことで、児童生徒のコミュニケーション能力や地域貢献への態度を高めることができた。 ● 今後は、「社会に開かれた教育課程」を踏まえたカリキュラム・マネジメントと、指導方法のさらなる具体化を行う必要がある。
鹿児島	鹿屋市立西原小学校	自分の考えを説明する力を育てる算数科学習指導の研究 ～数学的活動の充実を通して～	(1)研究の成果 ○ レディネスを揃えたり、解決方法の見直しを一人ひとりにもたせたりすることで、意欲的に取り組むことができた。 ○ まず・つぎに・そして・だからなどの接続語を用いて、自分の考えを説明できるようになってきた。 ○ 算数コーナーの常設により、ヒントを見つけようと子どもたちが目を向けるようになった。 ○ 実態調査で、「算数科で多い活動」の質問に「ペアやグループで考えを出し合ったり教え合ったりする」や「発表したり、説明したりする」が増えている。教師が意識して授業改善に努めていると考えられる。 (2)研究の課題 ○ 自分の言葉で説明するのが苦手な子への指導のあり方(個別指導のあり方) ○ 生かす場の時間をそれぞれの過程に、どのように設定していくか検討が必要 ○ 家庭学習の習慣化(家庭との連携)
鹿児島	喜界町立早町小学校	個や集団の「学び」に寄り添う授業づくりに向けた取組 ～「評価マトリックス」の具体化とその可能性～	○ 「つなぐ名人カード」を学校全体で活用することで、教科学習時や特別活動等の対話活動において、主体的に自分の考えを伝えよう、分かち合おうとする児童の姿が見られるようになった。 ○ ペア学習やグループ活動において、友達が発信しているときに相手が何を伝えようとしているか、自分の考えと同じかどこが違うかの比較をして聞く児童が増えてきた。 ○ 学習時のまとめや各学習ツールへの記入、作文や意見文など自分の考えや思いを書くことへの抵抗が少なくなり、短時間で書くことができるようになってきた。 ○ 授業のねらいを達成するために、学習形態や教具を工夫することで、積極的に相互の意見を練り上げたり、根拠を示しながら自分の考えを表出したりする児童が多く見られるようになった。 ● 各学級で対話活動の検証(実践)を重ねる中で、話合いのスキルが高まっている児童と思うように考えを伝えられない児童との間に生じる話合いのスキルの差をどのように詰めて、どの児童も考えを伝え合い高め合えるようにしていくかが大きな課題である。 ● 児童の実態を事前に想定し、児童の変容・伸びを評価するツールとして、本年度実践を通して有用性を検証するはずであった。「評価マトリックス」の検証データを十分に収集できなかった。 ● 研修内容の共通理解は図られているものの、実践する上で教職員の取り組み方に温度差がある。対話活動の意義や実践内容等について再度理解を深める場を設ける必要がある。

平成30年度 教育研究助成応募【学校研究】

鹿児島	志布志市立松山小学校	子どもたちが道徳的価値についてより深く考え、よりよい自分に向かう道徳教育のあり方	<p>○ 本研究をとおり、「教科道徳」における授業の展開について、4つの問い返しを含む発問の工夫や発問計画・板書計画の作成、学習形態の工夫等を重ねることで、児童に多面的・多角的に、そして深く考えさせる指導法の基盤ができた。</p> <p>△ 通知表や指導要録における評価については、記載する評価内容について大まかな方針を共通理解し、実施している。今後、評価の在り方については、本校の評価規準を作成し、学習状況を把握するための着眼点を明確にしなが継続研究を行う予定である。</p> <p>※「○」成果, 「△」課題</p>
鹿児島	指宿市立丹波小学校	<p>確かな学力の定着を図る学習指導(校内研修)の在り方 ~自ら考え筋道立てて説明・発表できる力をはぐくむ授業づくり~</p>	<p>○ 自己学習サイクルに基づいた学習展開の中で、ペア・グループ活動など、共同的な活動を工夫したことで新たな気づきや発見が生まれ学ぶ楽しさを味わうことができるようになってきた。</p> <p>○ 課題解決的また体験的な学習が展開され、児童の思考・判断・記述・説明・話し合いという活動の場や時間が増えた。</p> <p>○ 言語活動の能力系統表モデルを作成し、全教育活動の中で発表力・説明力の指導を進めたことで、自分の考えや意見、気持ちなどを分かりやすく伝えたり、記述したりする力も付いてきた。</p> <p>○ 学力向上週間、基本的な生活習慣チェックを家庭と連携し、PDCAサイクルの確立を目指しながら推進を図ったことで、家庭学習や読書、基本的な生活習慣の取組等で改善が見られた。</p>
鹿児島	鹿児島市立山下小学校	<p>未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業づくり ~主体的・対話的で深い学びの実現を通して~</p>	<p>研究対象としている六つの教科等(国語・算数・体育・道徳・外国語活動・特別支援教育)を中心に、育成を目指す資質・能力を整理・重点化し、「主体性」、「協働性」、「創造性」のある子供像の設定から、学習課題や単元で働かせたい「見方・考え方」を具体化していくことができた。これにより、単元全体を通して資質・能力を育成していく一貫性のある学びを実現することができた。また、子供が「見方・考え方」を働かせて課題を解決するために教師が発問を工夫したり、学びを振り返らせる手立ての工夫などを行ったりしたことにより、主体的・対話的で深い学びにつながる研究を深めることができた。今後は、学校の教育活動全体を通して育成を目指す資質・能力を整理することや知識の理解の質を高めるための教師の手立てについて検討していきたい。</p>

平成30年度 教育研究助成応募【団体研究】

都道府県	学校名・団体	研究主題	主要な研究成果
北海道	富良野市立布部小学校・未来フォーラム研究会	主体的に明日を創造する児童の育成 ～自分たちが暮らす地域を見つめなおし、自ら発信する取組を通して～	○「発信」「受信」「フォーラムをゴールとする」というねらいを定め、遠足の時間を見直し、教科横断的に計画する等工夫を凝らすことを継続している。 ○児童一人一人のインタビューのスキルが身に付いている。原稿なし、数回の練習時間など準備時間が激減した。何よりも子ども達自身が「あのときやったインタビューと同じようにすればいいんだ」と経験を既習事項としてとらえて、自信と興味をもってインタビューに取り組むようになった。合わせて、話し方・聞き方のスキルが高まった。 ○地域のイベントとして第二回「ぬのベマルシェ」が開かれた。子ども達も継続して参加した。学習したことが生活に生かされる場となった。 ○このような形態の学習を継続していけるよう工夫していくことが今後の課題である
東京	江戸川区立松江第三中学校	不登校を中心とした特別な支援が必要な生徒への組織的対応の在り方 ～校内指導体制を活かした対応のモデル化～	1. 研究の成果 (1) 不登校等への初期対応を徹底するためには、毎朝の欠席状況の把握を組織的に行うことと、「基礎情報カード」「引き継ぎカード」をもとに配慮生徒の把握をすることが必要である。 (2) 不登校等の支援を組織的に進めるためには、中心となる委員会が必要である。定期的開催することで、情報交換だけでなくケース会議(支援策の検討)まで発展させることができる。 (3) 家族療法的アプローチは、支援策を考えるうえで大変有益な方法である。ただし数回の研修等で基礎的な知識と技法を学ぶ必要がある。 2. 今後の課題 (1) 本研究では未然防止について言及することができなかった。今後、不登校の生まれにくい学校風土の醸成についての研究も必要がある。 (2) 「引き継ぎカード」「基礎情報カード」を、小学校から中学校に直接引き継げるようにする制度上の改善が必要である。
東京	江戸川区立小岩第一中学校	生徒の意欲を引き出す学習活動の推進 ～継続的な授業改善と人材育成～	成果1 授業改善について ・学年や教科により指導方法が異なるなど取り組みに差が生じてしまう。そこで、グループ学習の導入、机の配置、授業検討会の実施等の「きまり」を設けて実施した。また、全校(全教科)で実施することにより指導の一貫性、統一性が図られた。授業に関して生徒の迷いもなくなりグループ学習や表現活動に前向きに取り組むようになった。 成果2 人材育成について ・比較的若手の教員を研究主任として任命し、全校で実施している授業改善に中心にかかわらせた。任せて取り組ませることで学校経営・運営への参画意識が高まり、自身のキャリアアップにも役立った。 課題 ・毎年教員の異動があるため、年度当初の研修は「授業改善の取り組みと内容の理解」という同じ内容になってしまい、一時的に改善が停滞する。また、授業改善になかなか取り組もうとしない教員
神奈川	神奈川県小学校教育研究会	次代を担う子どもを育む小学校教育の創造 ～学び合い高め合う子どもの姿をめざして～	(1) 教育メディアの活用力がついた →多くの情報が発信していることを理解し、情報の制作・発信する力 当たり前の日常の中から自分のまちの良さに気づく力 技術の向上・どの児童にも同じように活用、取り組みができる力 (2) 他者意識が育った →情報発信の世界には多くの人がいること、その中で育てられていることを理解し、人を尊重する力 相手意識をもって情報発信する力 (3) 多面的な見方ができるようになった →多くの人の見方を知り、多面的に見ることを理解し、多様性を受け入れる力 多くの見方、表現方法を知ること、よりよくする効果的な方法を探る力 (4) コミュニケーション力に変化が見られた →子ども同士の自然なコミュニケーションの力 コミュニケーションツールの比較・選択ができる力 (5) 主体的な取り組みができるようになった
新潟	上越科学技術教育研究会上越市立清里小学校	昨今の理科担当教員のニーズに合った事業の模索 ～「上越科学技術教育研究会」の活性化・充実をめざして～	当会の主な事業として、会員の資質向上を図るための「宿泊野外研修会」の実施、日々の理科実践について発表する「教職員理科研究発表会」の開催、上越教育大学の先生方をお招きして講演をいただく「理科を語る会」の開催、教職員理科研究発表会の中からいくつかの研究を冊子にした「科学上越」の発刊がある。会の役員が中心となってそれぞれの事業を進め、日程を再検討したり、各種事業への参加を積極的に呼びかけたりすることで、29年度に比べ30年度は各種事業への参加者数が増えた。例えば、教職員理科研究発表会に参加しやすいように半日日程に変更して実施した。そして、これまでの踏襲ではなく改善の必要性を役員一人一人が自覚し、各事業を推進できたことが最大の成果である。

平成30年度 教育研究助成応募【団体研究】

新潟	元気塾	学級活動の魅力伝え、学びあう特別活動サークルの取組	<p>1. 主な研究成果</p> <p>(1) 初めて学級活動の授業、実践をしたという仲間が増えてきた。授業公開を続けていくことで、若い先生方のサークル研修への参加が、毎年増えてきている。各学校には、学級づくりや子供たちとの信頼関係づくりにおいて、悩んでいる先生がおり、サークル会員が声をかけることで、先生方への研修の要望に応じている。</p> <p>(2) 実践を通して学びあう場ができた。誰もが協議に参加できるというよさが学級活動にはあり、論文を発表していくことで、参加した皆で、具体的な子供の姿を通して、研修を深め、自分の実践へのヒントを得ることができている。実践は、担任とその子供たちによるオリジナルな活動となるので、参加者にとって得るものが多い研修となる。</p> <p>2. 課題</p> <p>○より具体的な明日にも使える実践例を提供し続けていく。出版物には、参考となる実践例が紹介されているが、その実践は一般的なものであり、子供とともに作り出す魅力や苦勞、身近な素材を生かした活動の展開などが紹介されていない。子供たちが見せる生の姿、子供たちとともに格闘する実践者の姿を公開していく使命は大きい。</p>
新潟	南魚沼郡市教育振興会 中学国語部会	言葉に着目し、読みの広がり、深まりをうながす授業 ～協働的な学習を通して～	<p>○ 協働的な学習を通じた読み深めの方策として「知識構成型ジグソー法」に着目し、7か校から各校1名の研究推進委員を中心に部員全員での授業実践を積み重ね、成果と課題を見極めながら検証した。</p> <p>1. 生き生きと課題に向き合う生徒が増え、主体的な態度の向上が見られた。また、教科書の本文から読み取った自分なりの考えをワークシートに書き出したり、疑問点を積極的に質問したりするようになった。</p> <p>2. 根拠となる表現を本文から抜き出すだけでなく、その表現をどう捉えたか解釈を加えることができるようになった。</p> <p>3. 話し合いを重ねることで、一面的な解釈から多面的な解釈に広がり、読みを深めることができた。</p> <p>4. 7か校の部員全員が、一人1回以上の授業公開を行ったことで各校の授業力が高まり、また、南魚沼郡市全体として研究に取り組む上での大きな推進力となった。さらに、各校で研究テーマを共有して、実践しながら成果と課題を見極め、授業づくりに生かすことができた。</p>
新潟	社会科教育研究会	根拠をもって意見を形成し、課題解決を図る生徒の育成 ～燕市・西蒲原郡研究実践を通して～	<p>1. 成果</p> <p>生徒個人が意見を形成する過程と形成した意見を課題解決のために活用する場面の両方について研究を進め、思考ツールを用いた学習が思考の整理に有効であることを確認できた。思考ツールの活用により、ファシリテーション学習での意見を発表する力の向上につながった。</p> <p>2. 課題</p> <p>批判的思考力を養うための授業改善に加え、小集団での学習後に思考の変容を確認するための時間や課題解決がなされたかを検討するための時間の確保が課題となった。今後は単元で学習する重点事項と振り返りを1つにまとめた単元シートを作成し、生徒が意見を再構築する時間を確保するとともに単元の学習内容を可視化し、思考の変容が明確になるよう取り組む。</p>
静岡	三島市教育研究会理科班	小学校理科教員の生物的領域における実験技能を高めるための方策 ～三島版授業改善モデルプランの開発と研究授業による改善～	<p>・三島市内の全校に小学3年から小学6年までの各学年における生物学的領域のモデルプランを提案したことで、理科を担当する全教員が単元の構成と構想を見通して授業に臨むことができるようになった。また、独自に発足した推進委員会が要請のあった小学校に出向いて理科の教材研究や授業構想の支援を行うことで、教員の理科授業に対する不安を払拭した。さらに、敢えて理科が苦手な小学校教員が研究授業を行うことで、誰もが理科の専門性の強さや実験の難しさなどの懸念から脱して理科授業に向き合うことができるようにした。</p> <p>・今後は、全教員が困っている失敗しやすい実験・観察を洗い出し、失敗しないようにするため創意工夫を開発していきたい。</p>
愛知	西春日井地区小中学校校務主任会	未然防止を目指した安全・安心な学校づくり ～コーディネーターとしての危機管理マニュアル作成を通して～	<p>本研究では、近年の学校や児童生徒等を取り巻くさまざまな安全上の課題の増加を受け、地区内32校が未然防止を目指した安全安心な学校づくりを目指し、危機管理マニュアルの見直しを行った。</p> <p>【成果1】</p> <p>各分野における取組を通して、安全に関する適切な対応が理解できたこと、職員の主体的な姿が見られたこと、危機管理に対する意識が高まっている職員が増えてきていることなどの成果が上がっている。この取組を継続・発展させることで、職員が適切な意思決定を図れるようになることを考える。</p> <p>【成果2】</p> <p>実効性のある危機管理マニュアルとしていくための課題が見えてきた。それは、「危機管理マニュアルへの対応フローの組み込み」「職員への周知方法の工夫」「校務主任の学校安全コーディネーターとしての動き方」の3点である。次年度は、これらの課題を改善すべく、研究を進めていきたい。</p>
愛知	愛知県立豊明高等学校	基礎的な読解力及び主体的に学ぶ態度の育成をめざした授業実践 ～新聞コラムの活用及び表現活動を通して～	<p>本校国語科の授業では、従来から生徒の読解力の育成に向けて取り組んできた。平成30年度より新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けた授業改善も開始した。その取組例は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞コラムを利用した速読練習 ・新聞スクラップ、読書記録の作成 ・「山月記」「枕草子」 読解内容をふまえた4コマまんがが作成 ・「舞姫」 読解内容をふまえた寸劇発表 ・「源氏物語」 グループワークによる調べ学習と壁新聞の作成・発表 <p>などである。私たち教科担当は日々 試行錯誤の連続であるが、生徒たちの反応はおおむね意欲的で、楽しんで取り組んでいる。しかし生徒たちの読解力不足は否めず、克服に向けて継続的に取</p>

平成30年度 教育研究助成応募【団体研究】

山口	光市教育研究会 事務研究部会	<p>地域と学校の未来を「つなぐ」事務職員 ～きっかけはコミスク 自分にできることってな んだろう～</p>	<p>コミュニティ・スクールへの参画ということで始まった研究であったが、事務職員は常に学校の窓口であり、校内全体の様子を俯瞰してみることができるという特性を活かして、さまざまなもの・こと・人を『つなぐ』ことが可能であることに気づくことができた。</p> <p>来校者に「また来たい」と思ってもらえるような接客、行事ことにひと・もの・資金でまとめた一覧表の作成、Facebook、Webページ等による学校の広報活動等の取組を通して、校内外での事務職員の担う役割について考えてきた。</p> <p>児童生徒数が減少する中、学校の中だけでは多様な活動ができにくくなっている。また、地域の活力を担う児童生徒を育てるという観点からみても、ますます地域との連携を求められると思われる。</p> <p>私たち事務職員はこれからも柔軟な姿勢でさまざまなもの・こと・人を『つなぐ』事務職員でありたいと考える。</p>
----	----------------	----------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

平成30年度 教育研究助成応募【個人研究】

都道府県	学校名・個人	研究主題	主要な研究成果
山形	山形県立新庄南高等学校	世界史Aでの探求型学習による学習成果の統計的分析 ～学校現場の教員の完成や直感は、どれほど信頼できるのか？～	『生徒の探求型学習への取り組みの程度によって、その後の学習成果に差がある。』という仮説を提唱し、複数回の授業実践に取り組んだ。その後二元配置の分散分析を行い、学習成果を検証した。平成27年度1学年では、1時間で行える探求型学習を実践した。分析の結果、仮説は支持され、有意な交互作用も確認された。平成29年度1学年では、数時間を要する探求型学習も加えて実践した。こちらでも仮説は支持された。また、有意ではなかったものの、上位者で学習成果の高まりが感じられた。本研究では、現場の教員の直感を、信頼性のある数値で分析し確認できた。今後は効果的な課題の設定方法と並行し、評価方法の研究にも取り組んでいきたい。
茨城	つくば市立荃崎第一小学校	実感を伴った理解を図る理科学習指導の在り方 ～学習と生活とを関連付ける体験の場の工夫を通して～	【研究の成果】 ・導入で、自然体験や遊びを通じた体験活動を取り入れたことは、主体的に問題解決しようとする意欲を高めるのに有効であった。 ・観察や実験の視点を示し、情報交換の場を設定したことで、既存の知識を生かしながら結果や考察の妥当性を確認したり、気づきを再検討したりできるようになった。 ・ものづくりを通して、学んだことを生活に生かす場を設定したことで、理科学習の有用性を認識することができた。 ・様々な自然体験や科学的な体験を蓄積する場を設定してきたことは、児童の科学的探究心を育む上で有効であった。 【今後の課題】 ・年間指導計画の見直しを図り、児童が自然の事物・現象に触れ合う機会を計画的に位置づけたい。
埼玉	加須市立高柳小学校	ICTを活用した主体的・対話的な算数授業の実践 ～アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善～	【成果】 ① タブレット端末を活用しながら授業を進める中で、児童の意欲向上が顕著に見られた。 ② 「友達の考えがわかって嬉しい」、「色々な考え方ができるようになった」と、達成感・成就感を感じる児童が増えた。 ③ 単元終了後のテスト等による点数の変遷から、基礎学力の定着が見られた。 ④ 友達と考え方の交流を行う中で、自分の考えをより分かりやすく伝えようと工夫して記述することで思考力・表現力の高まりが見られた。 【課題】 ① 学習効果をより高めるためのタブレット端末の活用方法については、更なる検証が必要である。 ② 自治体間や学校間においてもICTの整備状況は大きく異なっている。本研究はあくまで、所属校における整備状況下での活用実践例となっている。
神奈川	横須賀市立長沢中学校	資質・能力を育む教育課程の編成と教育活動の工夫・改善 ～共に拓く技術・家庭科の学習～	成果としては、実現可能な条件下で、生徒の学びをより深められたことである。テスト前に、一度調理室で練習すると生徒の動きがとても良くなる。経験すれば自信が付き、心のゆとりにつながる。けがや事故を減らすことにもなる。生徒同士でお互いに見習ったり、助言したり、評価したりすることで、学び合いだけでなく、自分の実力を客観視することができるようになった生徒が多い。自己評価と教師の評価とのギャップを埋めることにもつながった。家庭科の先生方は、全校生徒を評価するだけでなく、時間数の関係で他教科を教える方が多いと思う。時間を有効に使う評価資料の集め方を工夫したい。
新潟	五泉市立五泉小学校	もののきまりを使って身の回りの現象を説明する 子どもの育成	もののきまりが使われていることが分かりづらい現象を提示し、その現象を説明させることにより、子どもは、もののきまりを実感を伴った理解にさせることができる。 特に、次の働き掛けが有効であった。 ① もののきまりが使われていることが分かりづらい現象を提示し、その結果を示す。 ② 提示した現象と比較させたいものを図で提示する。 ③ 考えた要因が現象に影響しているかどうか確かめる実験を行わせ、説明させる。 子どもに問いをもたせ、学ぶ意欲を喚起するには、授業の始めにどのような現象を提示するかが大切である。身近なものを使って子どもに問いをもたせる事象提示をこれからも考えていく必要がある。
新潟	上越市立三和中学校	当事者意識をもちながら社会や人とかかわる生徒の育成 ～総合的な学習や道徳の時間、特別活動との接続を図った授業実践～	・2年生に進級後、職場体験学習や修学旅行、異文化交流活動、演劇学習等を通して、知り合い、共に活動した国籍や年齢の異なるスタッフと積極的に交流し、多様な生き方があることに関心を高めた。 ・異文化交流では、英語のみならず、相手の目を見る、うなずく、朗らかな表情で聞く、ジェスチャーを用いるなど様々なコミュニケーションのあり方があることに気付くことができた。 ・年度末に総合的な学習の時間を振り返る活動をした際に、諸々の活動のなかから一貫するテーマや意味を見出し、価値づける生徒が複数いたことが、生徒の記述から確認できた。 ・何かができない自分を恥ずかしがる生徒の姿は少なく、安心して自己表現するムードが定着しつつある。
新潟	新潟市立新津第一中学校	表現力を高める指導の工夫 ～ルーブリックを活用した段階的なパフォーマンステストを通して～	・帯活動として「すらすら英会話」を用い、スピーキング活動を継続して行ったことで、自分のことを自分で表現できる生徒が育ってきた。 ・教師(ALT)との1対1のスピーキングコンテストを年間4回行うことで、生徒の対話に対するプレッシャーが徐々に和らいでいった。また、回数を重ねるごとに達成感を味わい、「もっと話したい」と意欲的に取り組む生徒が増えた。 ・ルーブリックを提示し、達成目標を明確にすることで、生徒の活動意識が高まった。また、目標に到達できたことを実感し、スピーチ活動に対する自信を高めることができた。 ・英語科職員が目標と指導方法を共有することができ、指導向上につながった。

平成30年度 教育研究助成応募【個人研究】

長野	長野県松本県ヶ丘高等学校	「生徒が、自らの美術創作活動を通して、社会とコミュニケーションを取る方法の一考察」	<p>生徒たちは公募ポスターコンクールに応募し、自分の作品がカレンダーやポスターになって公共の場に掲示されることを通して、現代社会が抱える多くの問題を若者の目線で啓発すると共に、自らの美術創作活動が一般社会のモラルの向上に役立ち、自分自身も社会と繋がっていることの喜びを実感することができた。</p> <p>さらに、生徒たちは美術作品の発表や対話型鑑賞、ワークショップなどを通して、以前に増して積極的に多くの人々とコミュニケーションを取ることができるようになった。それは、学校の枠を越えて、地域社会に、全国の舞台に、海外の人々との交流へと広がりを見せている。</p> <p>このように、社会に向かって開かれた美術創作活動は、生徒たちのコミュニケーション能力を高めるばかりでなく、有効なコミュニケーションスキルの一つであることが今回の実践によって実証された。</p>
長野	長野県松本ろう学校	キャリア教育の充実を目指した教科指導について ～美術からのアプローチ～	<p>社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現するためのキャリア発達の重要性が学校教育に求められるようになって久しい。学校生活全般において行われることが多いキャリア教育について、教科からの鋭角的なアプローチを具体化したいと考え、本校独自のアセスメントを整えた。実証場面として、キャリア教育の視点を盛り込んだ『自“我”像』制作を高等部美術で行った。結果、美術だけの成果ではないにしても、生徒たちはそれまであまり言葉にしなかった自分の思いや将来への不安を語るようになった。真摯に自分と向き合えたことは、描画技術の高まりにも助けられ、自己理解の深まりと自信につながったのだと思いたい。</p>
岐阜	可児市立旭小学校	自己を見つめ、他者とともによりよく生きようとする子の育成を学校経営の柱として ～人間関係づくりを基盤とした取り組みを中心として～	<p>研究内容に基づく「道徳科」の授業研究を積み重ねることで、以下の成果があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・深めの発問や補助発問を複数準備して、話し合いの様相に応じ、適切に問いかけることにより、児童が自分の内面と向き合って考える姿を生み出すことができた。 ・「深めの発問」をなげかけた後、ペアやグループタイムを設け、全員が自分の考えを話し、仲間の考えを聞くことを通して、自分の考えをより深められる姿が生まれてきた。 ・授業後段で資料から離れ、自己を見つめる(書く)活動の前に本時学んだ価値やねらいに関連した具体的な場面を想起させたことで、これまでの自分を振り返り、自分自身のよりよい生き方を考えられる児童が増えた。
静岡	藤枝市立青島北中学校	子どもたちの「生きて働く学力」を育成するための美術科における研究実践 ～「クレイアニメーション」を題材とした授業の取り組み～	<ul style="list-style-type: none"> ・題材をもう一度練り返し、授業者も実践する中で、題材のおもしろさ(魅力・価値)を実感し、そのおもしろさを子どもたちに伝えていくことの有効性「クレイアニメーションのおもしろさ」 ①立体表現から映像メディア表現へ クレイアニメーションは、アナログ的な活動を主体とした映像メディア表現によるアニメーションであるため、その映像は粘土の色や形、影などが忠実に再現され、手作り映像の温かさや、粘土独特の質感等を表現できた。 ②素材の魅力 子どもたちは粘土という素材と出会い、実際に手にとってみて、粘土の心地よい感触(やわらかい質感)を楽しみながら、粘土を伸ばしたり、つぶしたり、分離させたりして、思いの形や色を創造していった。粘土は、その可塑性(ちぎる、くっつける、たたく、こねる、丸めるなど)を生かすことで、自分が納得いくまで何度も形や色をつくり直すことが容易にでき、自分なりの表現を思いきり楽しむことができた。 ③粘土に命を吹き込む 「動かないはずのものが動き出す」動きそのものや、粘土の柔らかさと、その質感を味わいながら、色や形の変化などを楽しむことができた。「小さな粘土の単位が集まって何かの形になる」「粘土が少しずつ変形することで、最初の形が全く別のものになる(メタモルフォーゼ)」など、アイデアを生かした独創的な3次元のアニメーションをつくり出すことが可能となり、指先で触ったキャラクターがまるで命をもったかのように動いた瞬間に、子どもたちは、歓喜の声を発していった。 <p>また、試行錯誤の中で、自分なりのよりよい表現方法を見つけ出していく時、仲間とのかかわり合いが生まれ、クレイアニメーションにおける「つくるおもしろさ」「見るおもしろさ」「見てもらうおもしろさ」を味わえた。そして、伝える人と伝えられる人との間において、双方向的なコミュニケーションがなされ、互いが刺激し合う中で、よさや美しさなどの価値や、互いの作品の中にあるさまざまな思いを、子どもたちは感じとり、豊かな感性を育むことができた。</p>
静岡	静岡県立磐田南高等学校	読書指導による大学受験に対応する学力向上の試み ～直木賞候補作と梶井基次郎「檸檬」を使ったInputとOutputの実践～	<p>高校生直木賞は本校ではすでに5回の参加実績があるが、より一層「Input,Output」を意識することを最初に伝えて読書会形式の自主的な話し合いに任せた。上期、下期ともに自分たちが選んだ「磐田南直木賞」作品とは別に、直木賞受賞作の予想を見事に的中させた。</p> <p>梶井基次郎の『檸檬』は、この作品を気に入った者と理解に苦しむ者に分け、同じ意見のグループ、異なる意見を持つ者を混ぜたグループ、二回に分けてグループ討論を行った。これにより生徒の理解が深まり、一人一人の感性を生かした読み込みができた。</p> <p>第一回高校生直木賞受賞作「巨鯨の海」を使った受験指導は現在継続中である。5分間黙読してその日自分が読んだ分のあらすじを発表させているが積極的な取り組みが見られる。</p>
愛知	愛知県立半田農業高等学校	学習成果を生かした地域連携の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ・商学連携(半田市商店街連合会との連携)では、「ごはんだ食まつり」「醸すプロジェクト」など地域が考案する活性化策に、高校生のバイタリティーと若者らしさを加味することで、地域と面につながり、学習活動に発展性をもたせることができた。 ・グリーンカーテンの設置((株)中部国際空港セントレアとの連携)では、環境教育の推進と地域貢献に大きな成果を収め、また、セントレアの環境負荷の低減への取組にも貢献し、「Win-Winの関係」が構築できた。 ・生徒に「地域のためにできること」を考えさせ、実践・披露させたことは、主体的な学習につながった。 ・地域連携の推進は、生徒のキャリア形成能力や自己有用感の醸成などに効果があり、学校の活性化につながった。

平成30年度 教育研究助成応募【個人研究】

愛知	愛知県立春日井工業高等学校	PID活動(言語活動)による工業高校「課題研究」の実践事例報告 ～社会的課題に取り組む態度の醸成と学術的研究姿勢の獲得～	本研究論文での実践事例は、 ① 教科「課題研究」の教材として「孫が作る高齢者向け電子ゲーム」を開発 ② 研究目的は、社会的問題に取り組む態度の醸成と学術的研究(探究)姿勢の向上 ③ 授業の活動方法は、PID活動(Presentations-Interviews-Discussions) ④ 製品の開発方法は、人間中心設計(HCD:Human Centered Design)である。 この実践により、生徒は『サイエンスコンテストで発表し、チームで協力して、プログラミングを学ぶことができた』と感じている。しかし、「課題研究」当初において目的と内容の理解不足が認められた。 そこで、教材の動画をYouTubeに上げて、授業前に生徒に観てもらい研究内容の周知を図るようにした。なお、教材の動画は、現在、同サイト内で「テラオカ電子」で検索して観ることができる。
山口	下関市立角倉小学校	自己有用感を高める総合的な学習の時間の指導 ～ホテル飼育でつなぐ仲間と地域との絆～	教師だけではなく、地域の人々からも、活動の妥当性や公共性、実現可能性を問いかけてもらったことで、子ども自らがよりよく判断し活動の推進や修正を行っていく姿につながった。また、単元全体を通して、仲間や地域の人々と目標を共有し共に活動する経験を重ねたことで、互恵的な人間関係の構築を志する子どもの姿を数多く生み出した。「難しいホテルの飼育に取り組んでいる最上級生」、「地域の人に頼りにされている自分」といった認識をもつことができた子どもたちは、総合的な学習の時間以外の学びにも積極的に取り組んでいった。なお、この取組は、環境省主催「平成26年度こどもホタルレンジャー活動事例募集」において全国3位となる審査員特別賞を受賞した。
宮崎	宮崎市立恒久小学校	学校の力を高めるための教職員の資質向上プロジェクト ～OJTを活かした教育力の向上への取組を通して～	成果としては、OJTを生かした取組を推進したことにより、教職員の資質向上が図られ、それが学校の教育力の向上につながったこと、職員に具体的にOJTの意義とよさを実感させることができたこと、若手職員の学び及び実践への意欲の向上と中堅職員のミドルリーダーとしての自覚を促すことができたことが挙げられる。 今後の課題としては、1年間を見通した、勤務時間内における資質向上プロジェクトの線密な計画が必要であること、さらにOJTを生かすためには、職員の計画的な学校外での研修への派遣や自己研鑽の奨励を行っていかねばならないことが挙げられる。
宮崎	椎葉村立椎葉中学校	理科授業における問いの工夫 ～化学変化における粒子概念を用いた思考を促す学習課題～	1. 二酸化炭素中で『なぜ』マグネシウムは燃えるのだろうかという問いを設定することで、化学変化における生徒の粒子概念を用いた思考を促すことができた。 2. 「何」などの問は視覚など五感分かることのみに着目し、粒子概念を用いた思考を促しにくい可能性がある。 3. 今回設定した『なぜ』マグネシウムは燃えるのだろうか以外の『なぜ』という問いも化学変化における生徒の粒子概念を用いた思考を促すことができるかを検証していくことが必要である。 4. 何が酸化され、どんな酸化物になったかを判断したり、酸化や還元についての知識を習得したりする手立てについても調べていく必要がある。